

北越谷の歴史

古代

中世

主催 北越谷公民館

講師 山崎善司

目次

| | |
|-------------|-----|
| 始めに | 1頁 |
| 北越谷の古代 | 2頁 |
| 浅間神社 | 3頁 |
| 香取神社と久伊豆神社 | 4頁 |
| 越谷の地質 | 5頁 |
| 昔は海だった | 5頁 |
| 越谷の古墳 | 7頁 |
| 奈良制の地名 | 8頁 |
| 別寄 | 8頁 |
| 北葛師と騎西郡 | 10頁 |
| 藤原秀郷の一族 | 11頁 |
| 野与党の一族 | 11頁 |
| 古志賀谷氏 | 12頁 |
| 兼倉時代 | 13頁 |
| 新方庄の成立 | 14頁 |
| 南北朝時代 | 17頁 |
| 南北朝の合一 | 20頁 |
| 室町時代 | 21頁 |
| 禅秀の乱 | 21頁 |
| 永享の乱の前提 | 22頁 |
| 永享の乱 | 23頁 |
| 結城の合戦 | 24頁 |
| 戦国時代 (1) | 25頁 |
| 足利成氏兼倉公方と成る | 25頁 |
| 成氏古河公方と成る | 25頁 |
| 道灌殺害と成る | 31頁 |

| | |
|-------------|-----|
| 長尾景春の叛乱 | 30頁 |
| 戦 国 時 代 (2) | |
| 北条早雲の台頭 | 33頁 |
| 而上杉氏の和議 | 34頁 |
| 三浦氏の滅亡 | 35頁 |
| 北条氏武蔵侵略 | 36頁 |
| 江戸岩槻城落る | 37頁 |
| 河越城落る | 38頁 |
| 関府台合戦 | 39頁 |
| 河越大夜戦 | 39頁 |
| 戦 国 時 代 (3) | |
| 太田資正氏策と和議 | 41頁 |
| 長尾景虎関東に出馬 | 41頁 |
| 越谷会田家の出自 | 42頁 |
| 越谷会田家の出自 | 43頁 |
| 三河同盟成る | 43頁 |
| 景虎管領就任式準備 | 44頁 |
| 関府台の合戦 | 45頁 |
| 太田氏資討死 | 47頁 |
| 氏繁文書大相模不動院 | 47頁 |
| 本能寺の変 | 48頁 |
| 氏房文書大相模不動院 | 49頁 |
| 秀吉小田原征伐 | 49頁 |
| 小田原城落る | 50頁 |
| まとめ | 51頁 |
| おはり | 77頁 |

以
上

北越谷の地は、往古は下総国新方庄と称した北越谷の名は、住居表示変更により呼ばれる様になつたがそれ以前は、南埼玉郡大袋村大字大房と言つた。

始めに

北越谷の歴史を語る前に、旧名の「大房」と呼ぶ事に致しますので御了承願つて置きます。皆さんばかりでなく越谷市民の大部分の人は「越谷の地は昔は海だつた、人等住めなかつた」とか「越谷には古い歴史などはない」と等と言つた話しを信じている事でせう。又それでは、人が住み歴史が語れる様になつたのは何時ごろからだろうかと問えば、「鎌倉時代」とか「江戸時代から」という返事が返つて来る。

私も、永い間そう思つていた。日本歴史には古い時代の事があるが、さて越谷の事となると、霧の中の如くで聞いても話してくれる人もなかつた。幸いな事に私の母は町内でも旧家でしたので、昔々越ヶ谷に越ヶ谷太郎と言う人が居た一と言つた話を聞いた位のものである。

昭和三十九年越谷市郷土研究会が、初代大塚伴鹿市長の肝入りで、市史編さんの資料と伝承の発掘の爲に、発足され私は四十一年二月から入会させていただきました。始めは先輩諸氏の研究を推し進め強めるばかりでした。その内その熱気に、みせられ、私自身がのめり込んでしまつた訳です。

さて、戦後の歴史家は、皆一様に日本で一番古い書物「古事記」「日本書記」を、当時の体制側が有利になつた。の爲のデッチアゲの歴史で、架空のものであるから、信用出来ない。と言う理由で否定されてしまつた。戦後の学校教育は勿論日本の歴史書の中から、六世紀以前の天皇の時代が消えてしまひ、古墳時代・弥生時代・縄文時代・石器時代という表現に変わつてしまつた。と同時に六世紀以前の事については、西暦何年と言う年期が消えてしまつた。

之等の事から、ヤマタイ国説に始まりヒミコ大王説・朝鮮支配説・独立王国説等々いづれも決め手が無いまゝ、百花競乱の如く、争われながら確証定説が出来ないでいる時に、一大鉄鎧となつたのが、埼玉古墳出土の鉄剣から発見された、百十五字の金文字であつた。

辛亥年七月に記す、オワケノオミ、上祖の名は、オオヒコ、その児の名多加利足尼、その児の名、テヨカリワケ、その児の名タカヒミワケ、その児の名タサキノワケ、その児の名ハテヒ、

その兎の名カサハラ、その兎の名はオワケノオミ、世々杖刀人の首と爲り、奉事し来りて今に至る。ワカタケル大王の寺、シギノ宮に在りし時、この百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

ワカタケル 雄略天皇 辛亥年 四七一年 カサハラ 笠原 オオビコ 大彦命
以上の事が明確化するに付け、ヤマタイ國説・ヒミコ大王説・朝鮮屬國説等一連の戦後の新説は根底から覆つてしまつた。やはり「古事記」「日本書記」が正しかつた、と言う事になりつゝある時に、又々先年大ノ安藝國の墓が発見された。中から古事記は私が書いたと言う、銅版に記された文字が出土した。

これにより、戦後一日本歴史の古代の時代が否定された」事が、是正され再び「古事記」「日本書記」が日の目を見る事になつた。

私は、歴史学者ではありませんので、鉄剣の文字や時代がどうのと言う論議は、良く解りませんが、越谷地方に残されている、古代自ら現代に致る迄、それ処に生活した人々の痕跡を見付け乍ら、私なりに現代から古代迄の歴史的空間を埋めて行き度いと考へて居る者です。或る時代歴史的には空間でも、必ずそこに人々の生活は有つたはずであると信じて居る者です。

北越谷の古代

越谷市史を開いて見ますと、中世以前のものは、薬師堂・稲荷神社・浄光寺・浄光寺より出土の古銭位いのもので、その他では千手院・東光院共に廃寺、八幡社・弁天社・麻利支天社・地藏堂がある事になつて居る。薬師堂は相伝えて大同二年（八〇七）稲荷は寛保三年（一七四三）の創建と伝えられて居る。然しながらその他の事は人物・地名等に関する関連の有るものは見当らず、江戸時代以後の事柄のみである。越谷市の中でも特に資料の希薄な地区である。

大房の地は、越谷市内で最も古い時代に開けた土地である。その理由は、元荒川の曲流した一画の中に浅間神社があるからである。こゝは大沢三丁目分になりすが、現行政区に分れない時代の事であるので御理解願ひ度い。(この辺と「言」事)遂時令マインションとなつてしまひその姿が破壊してしまつたが、この浅間神社が唯一の古代の役所であつた証の場所なのであると私は考へます。

浅間神社の祭神は木花佐久夜比売命である。國史大系と云う本に皇室御系図と云うのがあります。この中に木花佐久夜比売命の名が出て来ます。

天之御中主神一五代之孫一國之尊立神一〇代之孫一伊耶那岐神・伊耶那美神という神がおります、この神には六十八人の児が居ります。その内の六十六番目の神が、天照皇大神であります。この神が皇室では皇祖と申してあります。

天照皇大神の孫天津彦彦火ニ杵尊と同時代の神に、木花佐久夜比売神が見えます。皇孫ニニギノ尊の次の代に天津日高日子穗穗手見命の御母という事になつています。即ち、初代神武天皇より三代前の人物と云う事になります。

木花佐久夜比売神の事跡については、甲斐國誌にこの國の元宮、仙元宮は、旧は富士山頂にありしが、その時そこより見えし國々を治めたと記されている。即ち、伊勢より能登越後・上野毛下野毛・男総まで、と云う事になります。毎年今でも富士浅間神社より御符を持つて回つて来ています。

富士浅間神社にある宮ノ下文書には、元宮は、富士にありしが、富士の噴火で焼けてしまひ、宮として適しなくなつたので、之を伊勢に移したと、之れ今の伊勢神宮の事也。何時のころまでか、伊勢より参詣に来ていたと。書かれてゐる。

浅間神社のある所は、必ずその土地の内が一番高い所にあります。木花佐久夜比売神の時代、すでに人の集落があり開発されて、年貢が納められる程に生産物があつた為に、役所があり役人がいて、その辺の中心地であつた事の証拠であると思ふのである。

現代では、神社は宗教の対照でそこに神様が存在し、吾々を見えない力で守つてくれるその神の社であると理解している事と思ひます。事実現在では、ゴツト的存在です。然し神社というものを別の見方で良く見ると、その創設當時は支配者達の館であり、税金を取る役所と理解すればよい、今で言へば市役所である、中央の政治体制の変化で次の時代には、又別の所に役所が出来る(香取神社)と考へていただけば神社が理解出来る事と思ひます。

以上の事柄から、浅間神社の有る所は、木花佐久夜比売神の時代から開けていた処と思ふわけです。時代的に申しますと、何年とは言へませんが、神武天皇より今年で2642年ですので、その三代前の時代といえます。

香取神社と久伊豆神社

大房の地は古くは、下総国新方庄と言つたが、新方の庄に付いては後述する事にして、何故下総の国なのか。神社の分布を見れば一目で解ります。元荒川を国境に西に久伊豆神社、東に香取神社となつています。前述の如く、行政の役所であり税金を取る所と思えば良いと神社の説明をしましたが、その証拠なのです。

この時代には、行政区で分国している事がわかります。ほとんど河川が国境ですが現在とは河川の流路が違つておりますが、之によつて当時の本流を知る事が出来ます。

香取神社の祭神は経津主命と皇別の神である。久伊豆神社は大日貴命で（大国主命は同人という）で渡来神である。鷲神社は神別の土師氏が仕えている。之れはこの後永い間それぞれの系統の命達の支配となるので重要である。

香取神社の時代は、千葉県佐原市にある、香取神宮に明記してある通り神武18年創建とある。今から2624年前という事になる。常陸国の鹿島神宮は武ミカヒ命で創建は香取と同じく神武18年となつている。兄弟の神である。

久伊豆神社は、大日貴命が祭神である。埼玉県北埼玉郡大字埼玉と言ふ所がある。埼玉古墳で有名な所である（現行田市）古墳を取り崩した上に立つ神社で前玉神社がある。一時期浅間神社と言つた事もあると。騎西・埼玉迄の間には前玉神社が多く見られる。騎西町依り南方の地には皆久伊豆神社が祭られている。いづれも祭神は、大日貴命である。大日貴命は、須佐之男命（天照皇大神の弟）の六代の孫と言はれ、やゝ同時代の人物と思はれる。なほ埼玉比売命等の名も見えるので、前玉神社と久伊豆神社の関係は明確には説明出来ないが関連はある事であろう。

この様に考察して来ると、大袋村の内大房・大林・大竹・大道・恩間・三ノ宮には大房を除いて皆香取神社を祭つてい。浅間神社時代と香取神社時代では、三代程の時代差があり、香取の創建が、神武18年と言ふ事である。

香取神社の祭つて有る村は、下総国が出来て最初に入部した国造の経津主命の時代、即でに人々が集落を作り生活して居り、年貢の徴収に応じられる程の文化的生活が有つた証拠で、その当時の役所の跡即ち、現在の香取神社が祭つてあると云ふ事実がそれを証拠付けるものである。

越谷市の歴史を考える時、先づ一段に言はれてゐる事は、「昔は海だつたので人間等は住めなかつた」と云い又、では何時から人が住める様になつたのかと聞くと、「鎌倉時代」「江戸時代」と人によつて様々である。ではどれが正しいのだろうか。

それは、どれも正しいのです。但し、土地によつて、場所によつて、三〇〇〇年前にはすでに、人が住み、生活し生産活動に入つていた場所もあるが、「鎌倉時代」になり、開発されて、新方の庄と呼ばれた地もあり、「江戸時代」になり、利根川の水が銚子から直接太平洋に流れてから、新田開墾により村造りがなされた土地もあり、又遂い最近昭和三十年以降になり、ダンプカーやブルドーザーの発達により、埋立が進んで、住宅地と化した土地もある。

之れを証明するものに、土地台帳の表示がある。住居表示は何町何番何号となつたが、土地台帳の、古い地名を見ると、沼田・土腐田・腐化田・沼沢地・茨田・深田・谷地等の旧地の状況をそのまま表現した地名が多く残つてゐる。又、越谷駅東口駅前から、赤山街道緩瀬川まで、今でも何処でも地下二メートル以下には二三メートルの層になつて、真菰の根の尽に出来た泥土で乾燥すると燃える腐土の層がある。永く沖積層が湿地で、真菰が生い繁つていた証故である。

昔は海だつた

越谷地方の地質を考えるには、先づ関東地方全体より見ねば理解出来ない。

太平洋海溝より日本列島に向けて、流れ込む地球表流のマグマが、波状になつて地表の岩石（地球の皮）を押し上げて山脈を作る（地球の皺）。日本列島はこうして出来た皺であるが、地表は隆起と沈下が繰返へしている。その為は何年か毎に大地震があると言われる。山脈は地表の皺であるが、この皺の頂上の割れ目から、マグマが噴出するのが、火山である。山脈は増々高くなり、火山の活動は絶え間無く続き、滞積物は山を作り、谷を埋め、海を埋めて、陸地を広げた。こうして出来た関東平野に、火山が少々下火となり、降灰が続きこれにより関東ローム層が出来た。

武蔵・下総台地と言はれる赤土の数十メートルにも及ぶ層の、土質によつて何処の山からの噴出物か等が解るはずである。洪積層はこうして出来たものである。

山脈が高くなる程、河川の水の力は、速く強いので山を崩し、谷を削り岩石砂礫を押し流して、下流域を広げて行くが、大きい重い岩程上流に礫が小形な程下流にと、水の力で自然に分類され、下流になる程砂の粒も細くなる。流れ

がゆるやかになる程、砂に土が混じる。湿地帯や沼沢地ともなると、増々その粒子が小さくなり、土となり、粘土となる。こうして出来たのが沖積層である。関東ローム層より谷を削りながら水によつて押流された土砂が河川の河口近くに広大なデルタ地帯を広がって出来たのが、遠浅のゼロメートル地帯である。こうして出来たゼロメートル地帯が、地殻の隆起で陸地化したものが南埼玉郡・葛飾郡である。現在海拔〇メートルより五・六メートルの地帯は、永い時間をかけて出来た沖積層である。特に地盤の悪い地域である。

越谷市の地下二五〇〇メートルから三〇〇〇メートル程の処に白亜紀のものと云はれる砕けた岩石の層がある。(浦和岩槻の調査例) 中世代末のもので約一億年位前に出来た、地球の皮である。

越谷市の調査では、約四〇〇メートルより浅い部分に第四期層を見る事が出来る。(越谷市では、これ以上深部の調査例を見ない) その内、地表を含む二〇〇〜五〇〇メートル位の浅い部分に沖積層を見る事が出来、それより深い部分に洪積層があり、この洪積層の中に、海貝の化石を含む、砂泥層があり、かつて越谷地方は海であつた事を証する物証である。

これ等滞積土砂を分析する事で、砂礫の種類で火山の山の違い、火山活動の増減や地殻の変動等を知る事が出来、地表二〇〜五〇メートルにある沖積層の分析で、河川の流路の変更が解る。又海面上か海面下では生息の生物が違い、土砂の分析で人間の生活様式等推測する事が出来るはずである。

地殻の隆起沈下は、越谷地方の場合は、航空写真で見ると一目で解る。古利根川・元荒川・綾瀬川が同一の所で、流路が湾曲している事が、それを良く表わしている。関東地方には、各地に活断層が走つていると言はれるが、これにより隆起すると、その上流は、河川の流れが止まり、水が溢れて湖沼や湿地帯を作る、河川は流れがゆるやかになり、湾曲する、滞積物は泥土や粘土が多く、砂がなくなる、芦・真菰・蒲・茅・蓮・くわい等の湿地や沼沢の植物が繁茂する様になる。その種類により、水の深い所、浅い所、冬期には陸となる所、時々冠水する所と生える植物の種類も違つて来るので、地質の出来方が解る。

河川は冬期と夏期では、水量が違うので、夏期に運ばれた砂が、冬期には風に飛ばされて、砂丘を作る。これが自然堤防である。又夏期の大洪水で、大量の土砂が一度に流されて来て出来た微高地と重なつた場所が、早くから人間の住める様になつた所で、少々の洪水にも冠水しない土地で耕作に適した後背地を見る所が、一番先に集落の出来た土地といえよう。

越谷の古墳

越谷市内に古墳がある、と聞いて驚く人も多いと思いますが、埼玉県史に記載されて居ります。その前にこの附近にある古代人の痕跡を見て見よう。

丸木舟

明治時代の事である。大相模村々長をしていた齋藤茂徳門氏の記した、大相模の歴史と言う小誌に、「古老の話によれば、大相模村大字西方字沼端の土腐田に地運漕を（運の事）作り、之を掘り採る際に古代の先人が使用したと思える丸木舟を発見した。出土した地は、八条用水路に接した所で、隣村川柳村麦塚に境を接した所である。 ※大字西方

字沼端、大成町五丁目 ※川柳村麦塚、川柳町六丁目

現在の如く、科学的調査が何一つ成されぬ尽に、その大きさ、材質、年代等の記録のないまゝ、消滅してしまつた。縄文晩期のものと言はれている。

古墳

四世紀後半になると初期古墳が出現して来る。埼玉県史に、越谷地方では、大相模村に古墳のある事が記載されている。耕地の中央にあると記されているので、通称「一本杉」と言はれている所であろうか。その他に柿ノ木と八条（草加市）に古墳の所在が記されている。現在は、耕地制理や、三田方遺跡の発掘で、取り崩されて消失した。

この他に、私が発見したものに、大相模久伊豆神社の裏山の木立と境内が、古墳ではないかと思はれる。元荒川の高地であるので、盛土の量も少く神社境内は、この土を削つて建てゝあるが、遺跡が砂地なのにこゝだけが盛土となっている。過去における出土品の伝承を聞いていないので、今の所古墳であるか否かの確証を得ていない。

三田方遺跡

上記「一本杉古墳」の附近から、耕地制理の際に「土師器のツボ」が発見された事から、調査されてその出土品から、縄文中期の古代住居跡とし、三田方遺跡と名付けられた。その出土品の鑑定の結果、千葉縣市川市にある、鬼高遺跡の出土品と時代的に類似しているのので、この遺跡の年代推定を、鬼高式中期のものとの結論を得た。越谷市史によれば、五五〇年ごろと言ふ事はばば。

条里制の遺名

律令制度の根幹となる班田収授法は、六歳以上の男女に一定の面積の口分田を六年毎に班給して、農民から一定の賦租を納入させて、地方行政の財源とした。この口分田の班給事務を円滑に実施するには、戸籍と班田図籍が必要とされた。そこであらかじめ土地を丈量し、碁目状に正しく区画した地割をして置き、条里制を実施した。

耕地を六町四方（一町は一〇九メートル）に区切り、「里」とする。「里」を六等分して縦横に区切り三十六区画とし、この一町四方を「坪」と称した。一坪はさらに一〇等分されて「段」とした。地割の方向は、東西南北が原則としたので、南北を一条、二条と数え、東西を一里・二里と数えた。之により、田畑の位置は、何条何里何坪で表わされたことから条里制の名が生じた。関東地方では、困悟の近くに大規模な条里制が施行され、一般に地方行政の貫徹された地域に多く見られた。

大化改新（六四五）により定められた条里制の遺名と言はれるものが埼玉県史に記されている。

大相模地区に、四条、草加市に八条、増林地区に三丁野、宮本町に四丁野、桜井地区に大里・問久里等がある。然しながら、遺名と言はれているのみで、今までの処その痕跡となる証拠の物が何一つ見当たらないので、立証されていない。

別府

越谷市東町三丁目は、旧名大相模村大字別府と言はれた。記述も伝承も残っていないが、附近に条里制の遺名と言はれる四条・八条・三丁野等の地名が残っている。

武蔵国府中に国府が置かれ、条里制の実施等地方行政の浸透の為に、国の各地に支所つまり別府を置いた、その名残りの遺名である。利根川上流の熊谷市にも別府の字名が残っている。当時は舟便が最高の交通手段であつたらうから利根川・荒川を使つての船便には、合流点であるこの地点は、最適の地であつたらうと推測出来る。現在条里制の遺名が、手に付かないまゝであるが、別府の発掘もより大事なのではないかと思はれます。

越谷市史には、別府については一行も記述がない、又中央の歴史の中にもその記述を見ないが、現在その地名から推考するに、国府の所在地から離れた地で然も交通の要地である別府の地が、何の理由もなく地名として残っている訳がないと思えるのである。条里制の遺名も、別府を狭んで四条・八条と存在している。何時の日か発掘の日の有る事を期待する。

薬師堂

越谷市内にある寺院の内で、一番古いとされているのが、大相模（相模町六丁目）の大聖寺である。口伝によれば、天平勝宝二年（七五〇）と言う。鐘は延暦年間（七八二―八〇六）に鑄造したと記されてあつた。

大房の薬師堂は、押入の薬師とも言い、小字名が押立（オッターテ）に帰因するかは不明である。開基は、大同二年（八〇七）と伝えられている。

日本に仏教が伝えられたのは、五五二年であるが、その後急速に日本中に伝波された。その内薬師寺は比較的早い時期に伝波したものと思はれる。多くの薬師寺は天武天皇（六六二―六八六）のころの開基を伝えている。

薬師寺は多く国府近くに建てられているが、天平宝字五年（七六一）官寺として建造物等の制備をしたとされるので国府にある薬師寺は全国的に制備されたものだろう。私は、官寺の薬師寺は、今の国立病院と思えばよく、薬師堂は地方行政の市民病院と理解すれば、その存在を理解する事が容易である。

新編武蔵風土記稿

薬師堂 相伝へて大同二年、飛驒の工が一夜に建立したという。さはあれ一夜にして建せしなど、忘誕論をまたず、古えよりの像は、賊のために失ひしかば、今の像を安ぜり。この薬師を押入の薬師と唱ふ、その義は知らず。慶安五年五石の御朱印を賜えり。浄光寺の持なり。

五智堂

浄光寺 新義真言宗、末田村金剛院末、熊野山観音院と号す。本尊十一面観音を安置せり。宝暦六年の鐘をかく

浄光寺には、古くから寺の境内の何処かに、小判が埋められている。と言う伝説があつた。昭和五十年三月本堂の裏の、分譲墓地から、小判ならぬ、古銭が千八百余枚の出土した。永楽銭が主で、他はそれ以前の輸入銭が多く、足利期から豊臣期までのものであり、埋蔵した人は、徳川と小田原との交替時期の社会的不安な時代の人物であろう。

千手院 同門徒、熊野山不動院と号す、本尊不動を安す。 今廃寺

東光院 同宗三ノ宮村一乘院門徒、本尊阿弥陀如来を案す。 今廃寺

稻荷神社 村の鎮守也、千手院の持、下同じ、 ○ 八幡社 ○ 弁天社 ○

地蔵堂 千手院の持、 ○ 麻利支天社

浅間神社 大沢町二丁目所在大房と境を接する所にある。 大沢古馬呂、仙元宮の項によると、

享保十一年伊奈半佐衛門様御講に付、奉書上候、 七尺×九尺の宮有り、旧記略伝由、長元三年庚午六月勸諭深野滅七郎建立、その後承久二年午正月右源三郎の孫武兵衛与云者与り真蔵院江寄附すと云現在浄啓法印与云う者、七ヶ村を勧化して神碑を建立す、今の御神体也。以下略。

※長元三年(一一〇二八) 承久二年(一一二二〇) 但し、午とありますが、この年庚辰である? 旧記||真蔵院所持の仙元伝記の事。

北葛飾郡と騎西郡

大慶の乱

平将門については、将門記に良く記されていますが、中央の歴史から見ると、賊軍と言う事になります。恒武天皇の五代の胤高望王が、常陸守として任地に来てより、その子達に、それぞれの国を分ち与えた。将門の父良将は奥陸鎮守府将軍として奥州にいる時、病にたおれた、将門はその後都に登り昇官の道を求めた、その間に叔父良兼に父譲りの土地を押領された、之れがもとで一族間の争いとなり、遂に本家の叔父国香を殺した。京都に呼び出されたが、一応この事件は治まった。天慶元年(九三八) 武蔵権守與世王・武蔵介源経基と足立郡司武蔵武芝が争いを興し、将門が仲介に立ち治まった。源経基が将門・與世王が謀反すると朝廷に訴えたので、天慶二年(九三九) 乱が始まった。関東八ヶ国の国府の印鑑とカギを奪つた将門は、身づから新皇と称し岩井に宮を建てた。翌三年、平貞盛・藤原秀郷ら将門追討の軍は将門を岩井に攻め将門を滅亡させた。

之れにより将門に味方した。武蔵の地は、貞盛方の押領する所となつた。

藤原秀郷の一族

この乱の後、藤原秀郷は、大田庄下方以南（新方庄）と葛飾郡の内北葛飾郡（現埼玉県側）を領した。即ち、元荒川と古利根川及び東は江戸川までの間の地で現在の埼玉県側である。秀郷は、佐野・栃木・小山・古河・藤岡・鷲宮の領地の他に、新方庄・北葛飾郡を合せて領有する事になる。

これ等の領内には、藤原氏の一族が播遷した。歴史上著名な一族は、下川辺・大川戸・小山・結城・皆川・下川・風早等が見える。又藤の字を上につけるもので藤田・藤井・藤居・藤代・藤谷・藤城・藤波・藤倉・等々とあり又下に藤の字の付くもので、佐藤・新藤・近藤・遠藤・須藤・武藤・伊藤・斎藤・工藤・等々皆この一族である。大房の地に多いのは、藤井・黒田である、黒田は栃木県間々田市内に黒田と言う地名を持ち藤原の領内にあり、藤原の一族としての証として家紋に下り藤の紋を使用している。これ等の名字の人達に先祖は、と聞いても答えられる人は少ないが、皆この時以来領内に播遷した藤原一族の後胤であると思つて間違ひはないのである。

この藤原一族の本家は、奥州の役後奥州鎮護の為移つたが、後三年の役後奥羽六國の総領となり、平泉に住して、繁栄したが、養祿をかくまつた罪により頼朝に滅ぼされた。

野与党一族

越谷市の西半分、中央に元荒川が流れております、この川の西側で綾瀬川との間を、古くは、騎西郡と言つた。前述の如く久伊豆神社が祭られている地域である。

天慶の乱の後、桓武天皇一五世の孫一高皇王の子の末子に良文がいる。平将門討伐軍の大將貞盛の叔父に当る人物である。坂東八平氏の祖と言はれる。この良文が本家貞盛に味方して、将門討伐に功あつたので、武蔵国押領した、足立郡一ノ宮氷川神社の宮司西角井家の祖先と云う武芝は、武蔵国造の家柄であるが、これが今度の張本人であるが、この支配下の武蔵全域が良文の領地となる。良文の孫忠常武蔵押領使となり、その弟を騎西郡に入部させたのが、野与四郎胤宗である、野与党の祖と言はれる。（騎西郡は以前は私市キサイと言つた）私市（キサイ）はシノとも呼びその本拠地が篠（シノ）であつた関係上（今篠津村）篠津の野与に本拠を構えたので「野与」を名乗つた。（埼玉北部で熊谷・忍に私市党として武蔵七党の一つに数えられる党でキサイ又はシノ党と呼ぶのは之である）

野与の一族の初期には、北方が重要と見え（熊谷に以前としてシノの勢力があつたか）分家には、道智・多名・多賀谷・高柳・笠原・菅間・鬼窪として野与等に播遷した。野与一族は皆入居した地名を名字として名乗つてゐる。奥州の役、後三年の役の時に本家の野与主司恒宗が戦死したので、宗家から千葉上総介一代常長の第九子十郎行長号龍大夫が野与恒宗の後継として入部、葛浦町三ヶ村の大蔵に廻した。号を大蔵大夫とも言う。この行長が野与党の総領家を継ぎ野与本家と離れて箕谷総領家と称した。

この行長からの分家には南鬼窪・黒浜・佐那ヶ谷・江ヶ崎・白岡・金重・箕勾（ミノワ）・加倉・柏崎・横根・須久毛・渋江・村園・野島・小曾川・古志賀谷・大相模・別府・柿ノ木・青柳・八条・大曾根等の枝流の分派が見られる。

野与党は箕勾総領家が代表される様になるが、この野与党の活躍は、前後奥州の役・保元平治の乱・頼朝擁立・平家追討の源平の合戦・承久の乱・文永弘安の役・元弘の合戦・南北朝の騒乱・京都足利と鎌倉との内紛・結城の合戦・古河公方と上杉との抗争等々関東武士の名の有る処に野与党の名の出ない所無しと言える程の活躍を見せている党である。この党は、頼朝に従い、北条の信を得、足利尊氏に従い、野与党の名を挙げた、良く結束された党であり党の運命を決する方向を誤らずに来たが、やがて古河公方家と管領上杉との抗争の渦中に巻込まれその名が、歴史上から消えて行くのである。

古志賀谷氏

越谷の地名に関係する、古志賀谷氏も野与党の名のもとに活躍したので、直接名が出て来ないが、市内各地には、それぞれ的事件に関係のありそうな年代の青石塔婆を見る事が出来る。初代の板碑と思える、建長元年から、何代何時の時代まで繁栄したか等一際今の処不明だが、野与党の名が消えるころ、その運命を共にしたのでは無いでせうか。神明橋上流の川洲の中より出土した、康正三年の一枚の板碑がそれを物語るのではないかと思う。確証とはならないが、東松山市にある前弓稲荷神社の縁起書に、寛正二年越谷野において、合戦あり、上杉方勝利とある。板碑との符合から見ても、この合戦のころが、古志賀谷氏の滅亡した時期ではないかと思えるのであります。

これ等一族の内文献にその後も、渋江・八条等の名が見えるが、（八条は上杉八条家があるので、野与の八条とは異なるか？）やがて、小田原北条・古河公方・管領上杉の三ツ巴の乱戦の中で、次々と消えて行つてしまい、今中世を語るものは、各地の墓地や路傍に、ひっそりと建つ青石塔婆だけとなつてしまつた。

◎康正三年＝長祿元年（一四五七）の事である。

◎長祿元年と云う年には、（九月二十八日より改元）春より江戸・岩槻・河越城の修築が終つたので、古河公方攻撃が始まつた。

鎌倉時代の越谷地方は、元荒川により二分され、東を下総新方庄と云い、西を武蔵騎西庄と云つた。東は藤原秀郷流の枝族が播擲し、西は平良文の後胤野与党の枝族が播擲して、それぞれの旗の許に武士団を成していた。秀郷流は、栃木を中心に皆川氏が、小山には小山氏、古河には下河辺氏、大河戸に大河戸氏等が台頭し、騎西郡には、野与党の武士団が武蔵七党の中に数えられて、共に、前九年・後三年の奥州の役に出陣して、武勲を挙げている。前九年の時、千葉・葛西・藤原等は奥州鎮護の為奥州に残留したが、後三年の役の後、藤原家は奥羽六ヶ国の総支配に任じられた。奥州平泉に抛して、清衡・基衡・秀衡・泰衡と続き、今も平泉の中尊寺には、金色堂が輝やいている。藤原三代の栄華を物語る証である。藤原秀衡は義経を育てたが、頼朝と義経との確執により奥州に逃れた義経をかくまつた罪で、秀衡の死後頼朝に攻められ滅亡した。これが藤原秀郷流宗家である。

保元の乱(一一五六)平治の乱(一一五九)の二度の乱により、源氏の家人がほとんど全滅させられた後は、平家一族が全盛を極め、平家でないものは、人でない、と迄云はれた位い、高位高官を思いの儘にし、その専横極に達した。一方平治の乱で、源義朝が一族郎等と共に亡んだ時、その子頼朝は伊豆に流され、範頼・全成・義経等は寺に預けられて出家させられた。

治承四年(一一八二)頼朝伊豆に兵を挙げた。北条政子は流人頼朝に心を寄せたが、父時政の為に、山木判官兼隆の所に嫁入させられた、政子はこゝを逃げ出して頼朝のもとへ走つて結ばれた。頼朝は意を決してこの山木兼隆を討取り京都の平家に対し叛旗を翻えた。初戦は成功したが、石橋山の合戦に敗れ、安房国へ舟にて逃げる。

三浦・和田・千葉等の軍勢が馳せ参じて力を得、父祖伝来の地鎌倉に拠を定めた。この時千葉氏勢の中に野与党がいる。(治承四年十月の事である。これを期に関東の諸将皆一様に之に従う。この時下河辺・大川戸・小山等の氏族従う。

頼朝は鎌倉の大倉の地に御所を新築し、諸将の館の割付を行つた。街造りと同時に諸将の報賞安堵を行つている。この中で、大河戸御厨を平家の時代には絶えていたが、以前の如く復すと、御厨を回復して新ためて神明に寄進している。この時代の吾妻鏡には、下河辺・小山・千葉・安達・豊島・江戸・河越・葛西や、野与の一族である道智・洪江・多賀谷・箕勾・多名等の名が見える。大房の地にも当時名だたる武将でも居たならば、吾妻鏡に載つたのではないか、残念乍ら名が出ていない。近くの新方の地についての記述は、栄広山浄土寺清浄院由緒著聞書と云うのに記述がある、一新方向畑の邦大靈神は俗にいう新方様と称す。その先千葉氏の余エイ新方大領頼希は源義家朝臣の催促に応じて奥州に

戦功多し、前大平記に著す所の「新方次郎頼員是也」右新方様伝由。この寺に記されている事が唯一のものであるが、勿論後代にも同名の亂が居るので、鎌倉時代にも活躍した人物が居た事であろう。

新方庄の成立

前述古代の部、地質の項で、地盤地質の変化で、河川の流路が変り、そして国別や国境が変化する。地盤の変動で沼や湿地が出来河川が湾曲する事を述べて来たが、人々は時代と共に之等湿地帯に、排水路を作り新田の開墾に努めて来た。この一番良い例が新方庄である。地図上で見ますと、下流より、元荒川と古利根川合流地点より西は元荒川を岩槻の古隅田川迄、東は吉川町より古利根川を春日部市迄の三角地帯である。

新方の庄を良く見ると越谷市増森と云う処からこの三角地帯の中央に向けて直線的に排水路が掘られているのが解ります。現在新方川と云いますが、土地の人は千間堀と云っています。この堀が掘られ開墾されたのが鎌倉時代と云う事になります。旧村名では、増林・新方領・桜井・大沢・大袋・武里一ノ割・豊春・川通の各村と云う事になり、河川堤防の微高地にある旧部落を除いた、広大な水田地帯の事である。勿論当時はこれら村々の内今の様に全部が耕地化されたわけではなく、処々に排水不十分な、低湿地帯や沼池が多分に残されていた。大沢町だけでも大沢七池と云われる程である。

以上述べた如く、地盤の隆起で河川の流れが止まり、水が溢れて湿地池沼となり耕作に適さない土地を、水の落とし口を作り水を枯し、用水を作る事により耕作可能な土地にした、誰が開墾したのだろうか。春日部市備後に称名寺と云う寺がある。これと同名の寺か、三浦半島の神奈川県金沢に金沢称名寺がある。この寺の記録によると始め、北条政子の所領であつた事が解る。その証として、三ノ宮の一乗寺は、北条政子の開基を伝えている。その死後北条泰時命により、開墾が命ぜらる、と云う事になつてゐる。

寛喜二年(一二三〇)北条泰時、大田庄の荒野の開墾を命ず。とあるので、新方庄はこの時開墾されたものと思はれる。「新方庄」は、北条時政一義時、妹に政子一泰時、弟に実泰一(金沢に住すにより金沢を称す)一実時一頼時一貞頼一貞将と北条一門の本貫の地である。

二代実時は、文永六年(一二六六)頃別荘の内に持仏堂を以て一寺を開基して称名寺とした。実時は建治元年(一二七五)之の別荘に於て没し、息頭時が一時上総に流罪にされた時、別荘全体を寺となし、息貞頼は、寺を継いだ。六波羅深題となり、京都へ移り、寺は私寺から公寺となり、寺運は榮えたとあり、金沢氏と称名寺との関係がわかる。

金沢称名寺文書 ◎金沢瀬戸橋造管棟別注文案

下総河辺新方分

拾六貫五百文(三十貫未地)

(朱)百貫八百文この内八百文上撥料

(中略)

嘉元三年(一二三〇五)四月二十八日

覚 恵(花押)

金沢称名寺文書 ◎下総国新方検見帳

新方検見帳 十丁めん分

合 十丁めん分

四反三十分

まこ二郎

(孫二郎)

四反六十分

しよう三郎

(庄三郎)

五反

へい二郎

(平二郎)

四反六十分

いやとうし

(弥藤次)

五反

くゑそう三郎

(?蔵三郎)

巳上 四丁

分米八石

合計二丁二反小三十分 一丁と六反半三分そん
分米四石四斗二升五合 三石五斗一升六分そん

おまの分 (忍間)

七反

大夫五郎

(忠太郎)

六反大

ちう太郎

(忠太郎)

九反九十分

又太郎

(孫三郎)

三反半

まこ三郎

(孫三郎)

上段ヨリ続ク

八反三十分

大夫六郎

(仙教?)

□反小

せんけう

(入田?)

□反七十分

にゆえん

(弥太郎)

四反三百分

二郎太郎

(弥太郎)

□□九十分

いや太郎

(?寛)

二反三百三十分

ゆいくわん

(?寛)

□反と十五分

大夫太郎

(得田)

四反

太郎二郎

(孫六郎)

四反十分

まこ六郎

(孫六郎)

合八丁四反小十五分とくてん

(得田)

巳上

分米十六石九斗六升二合

その分田六丁三反小四十五分

そん十二石

七斗四升五合

巳上 十四丁七反三分 分米二九石五斗七升七合

ちやうの米合、二十一石四斗九升七合

そん分八丁一反十五分 十六石一斗四升一合そん

かりやくかん年十月三日

へい太郎

(花押)

ちやくわう

(花押)

当時の様子が良く判る資料である。十丁免・恩間の年貢米上納の書附である。

以上の金沢称名寺文書から考察するに、鎌倉時代には、頼朝の親領から、政子のもとと相続され、北条義時の支配となつてから、子集泰に与えたと見るべきである。こゝに金沢氏最後の貞将の奇進状がある。

金沢貞将奇進状

下総河辺庄内、赤山領、信濃国石村郡、武蔵国六浦庄、富田郷この所は為不輪之地永奉当寺候 この他父祖三代之間 奇附之所々者如本知行御管領不可有相違候 天下泰平之御祈念 可被致精誠候 恐々謹言

正慶元年一三三二二月十五日

武蔵守 貞将 (花押)

以上の如き奇進状により、金沢貞将から称名寺々領となつた事が解る。この奇進の翌年五月二十二日貞将討死しているので、北条氏の命運を察知しての事か、寺だけは、無事残つた様である。

以上の資料から、頼朝の親領から、北条政子一兄の義時一泰時の弟、一実泰一実時一頼時一貞頼一貞将一称名寺領と變つて行つた事が解るのである。

新方庄は始め、一面の湿村帯であり、わずかに元荒川・古利根川提防の微高地の狭長い土地に生活していたが、千間堀の開発により、排水が良くなつて、耕地可能な面積が多くなつて、「新方庄」と名付けられた。然し、利根川の本流が流れ、荒川も直流していた当時では、雨の度に水量が増せば耕作物は腐れたであろう。検見帳にある「そんふん」というのは、その間の事情を物語つておる事が解る。十丁免分で、二丁二反の内一丁六反が、そんなつており、恩間分で、十四丁七反のところ、八丁一反が、そんなつている。

本格的に大房・大林から、新方領村大吉迄が耕地化したのは、江戸時代になり、伊奈家が徳川の命により、荒川を現在の荒川墨田川に流して、元荒川とし(上流は接続していない)、利根川を銚子から直接太平洋に流路を替えて、水を枯した、そして、用水路に水量を調節しながら流す事で、耕作適地を作つた。これにより現在の耕地の原形が出来たのである。

それでも尚、沼田や池沼・土腐田等耕作不適地が多く存在していたのである。

新方の庄は、金沢氏の所領であつたが、正慶元年（一三三二）二月十五日、金沢貞将は父祖からの本貫の地全部を称名寺に寄進してしまつた。翌元弘三年（一三三三）五月二十二日新田義貞軍との合戦に討死している。北条高時も鎌倉の北条館で一族と共に滅亡した。註一正慶二年は元弘三年の事である。

鎌倉幕府が亡んで、南北朝時代となる。南朝方に新田義貞・北畠・楠正成・名和長年等、北朝方足利尊氏とで争う事になるが、新方庄では、春日部氏が新田義貞に従つてゐる。その他は総じて北朝方足利尊氏に従つて戦つた事になる。

春日部氏は「紀」氏の系にてその親族には、大井・品川氏等海運に關係ある一族が居る。春日部の地名に付いては、それより古い時代に、安閑帝の妃（五三一）五三五）春日山田皇女の御名代部より出ずる名で春日部と称したに始まる。日本書記に記されている。この御名代部が、敷ヶ岡に置かれたが、その一つであるが、未詳である。春日部の地名はこの様であるが、こゝに、紀貫之等の後胤で、紀実重が、武蔵権守と見える、この実重が春日部に拠したので、春日部氏を称したと比定する事が出来る。

春日部氏は、鎌倉府創設期からの名門であつたが、三浦氏と姻譜關係にて、三浦の乱に連座して所領を失う。この遺恨により、新田氏の催促に一番に応じたものと思われる。

春日部氏は、建武の中興に功あるにより、春日部郷及び山ノ辺郷の地頭に補任されている。尊氏が鎌倉から京に攻め上り、そして、西園に落ち、西園勢を擁して京へ攻め上り、湊川の合戦・鷲の森の戦として、義貞北国落で金沢にて討死、これにて、春日部氏も亡んだ事と思はれる。

この時代の新方庄内における、春日部氏の勢力分野は、不明であるが、唯一の痕跡である青石塔婆を調査表をもとに考察すると、元弘三年（一三三三）新田義貞挙兵し、延元元年（一三三六）迄の間に建つ南朝方年号は、

| | | |
|----------------|-----|-----|
| 元弘二年（一三三二） | 中曾根 | 岡崎宅 |
| 元弘三年（一三三三） | 一ノ割 | 田福寺 |
| 建武四年（一三三七） | 増戸 | 浄泉寺 |
| 正慶以下不明（一三三一〜三） | 中曾根 | 岡崎宅 |

以上春日部よりの新方庄北部と云う事になり、この地域の者達が、春日部氏に従つたと推察出来るのではないか。

入間川御所

文和二年（一二三三）尊氏は十三歳の基氏を入間川に在陣さす。北武藏の武士の多くは、足利に帰属する。新管領に畠山國清を命ず。この戦以來、児玉党・丹党・猪俣党等の勢力後退する。

足利尊氏没す。延文三年（一二三八）四月三十日没す。享年五十四歳と云う。

親田義親軍、延文三年（一二三八）新田軍動く、百余騎、基氏謀を巡らし、矢口ノ渡しにて義興を謀殺す。

京都將軍義詮と関東公方基氏兄弟の不和

京都では、將軍義詮は南朝方の討伐に奔走しているを、助けるべく管領畠山國清は、京都との不和な基氏を諫めて、基氏の許しを得て、延文四年（一二三九）坂東八平氏・武藏七党その他関東の諸兵を卒いて京へ上る。

基氏と國清と不和となる。

基氏は、國清が京へ上る留守に入間川の陣所を引揚て、鎌倉に帰る。在入間川は六年であつた。

京へ上つた関東武士は、長期の爲疲れて、國清に無断で帰郷する者多く出た為、國清も又鎌倉に帰つた。帰国後、國清は、之等の武士の知行地を没収した。

畠山國清の追放

康安元年（一二六一）基氏は、國清討伐を白旗一揆・平一揆等に命ず。國清西に逃れ後、奈良にて卒すと。基氏の基盤確定す。

関東公方基氏の権限は、強大となり、関八州に伊豆・甲斐の十ヶ國に及び、その権力は、將軍にも匹敵するものがあり、その発する文書は、「関東御教書」と云われた。

上杉憲頼管領に再登用

基氏は、京都に対抗する為、前執事上杉憲頼を再び登用した。貞治元年（一二六二）越後守護職を上杉憲頼に与えた。翌貞治二年（一二六三）憲頼を関東管領として招いた。

越辺川の合戦

前越後守護職だつた、宇都宮氏の一族、芳賀兵衛入道種可は之を不服と

して、上杉憲頼が鎌倉に出仕の途路を討つべく計画す。基氏之を討伐すべく出陣、越辺川流域の苦林野（坂戸）にて激戦、芳賀軍敗れて逃げ帰る。基氏・憲頼之を追つて宇都宮を攻め、之を降す。

宇都宮氏は、尊氏存命中より京都陣であつた。之れで基氏と上杉憲頼の管領の地位が定まつた。

基氏没。貞治六年（一二三六）

関東公方基氏没す。享年二十八歳、息氏満、家督を相続す。

將軍義詮没。貞治六年（一二三六）

足利一代將軍義詮も同年没す。義満三代將軍となる。

貞治七年（一二三六）二月、

河越中心に平一揆、上杉憲顕上京の留守に起きる。直ちに帰り、之を平定す。

貞治八年（一二三六）七月

上野にて新田義宗兵を挙ぐ、鎮定、義宗討死す。南朝方殘党滅す。

宇都宮氏綱追討

宇都宮氏綱動く、直ちに追討軍出張して之を屈伏させる。

上杉憲顕没す。

貞治八年（一二三六）上杉憲顕没す。山ノ内家より能憲、犬懸家より朝房二人が管領に任命される。

將軍義満と関東公方氏満不和となる

康暦元年（一二三九）対京都の対立の事で、管領憲春は死を以て諫める。氏満思止まる。

氏満南朝の討伐に京都の応援として、河南村迄出陣。

下野小山氏の討伐に出陣、府中まで出張す。

南北 朝 合 一

明応三年（一二三九）

永年に渡る南北朝の騒乱も、南朝方、力盡きた形で、合体した。五十七年間を経過して遂に終止符が打たれた。

南北合一の恩賞

將軍義満は、関東公方氏満に、奥陸出羽の二国を分国す。

明徳三年（一三九二）南北朝合併する。建武以来、南北朝の対立で全国各地で戦乱が続き、関東では、興国四年（一三四三）北畠親房の北関東から東北に勢力拡大策も下妻太宝城・関城の落城で望みを絶たれ、新田義興も一時蜂起して鎌倉を占領したが失敗、後謀殺され、新田義宗の蜂起も義宗の討死に依終エンを迎えた頃、明徳三年南北朝の合一が成された。

明徳は四年迄で、応永となる、応永は三十四年続く。

応永六年（一三九九）京都で大内氏の反乱の時、鎌倉の氏満の次、満兼は、応援の為、府中迄出張したが、反乱鎮圧の知らせて引返す。

応永十六年（一四〇九）公方満兼没す。十二歳の持氏、家督を相続す。

この相続に対し、満兼の弟満隆が不満で、陰謀を企てるの噂が立ち、持氏は一時、山ノ内上杉憲定の邸に身を寄せたが事無く済んだ。

公方家の内紛、管領家の反目

当時、公方持氏と叔父満隆、管領山ノ内家と犬懸上杉家との反目あり。

応永十六年（一四〇九）持氏相続後、間も無く、犬懸家上杉禪秀が管領に就任す。

応永二十二年（一四一五）持氏十八歳の時、犬懸家の家人、常陸国越前六郎の世帯を没収した。之に対し管領上杉禪秀は、持氏に抗弁をしたが入れられず、遂に禪秀は、管領職を辞退する。山ノ内上杉憲基が管領となる。

京都將軍家の反目

この頃京都でも、將軍義持の継嗣問題を巡り、その子義量と將軍の弟義嗣との間に反目があつた。

応永二十三年（一四一五）義嗣は秘かに、鎌倉の禪秀のもとに使を派遣して、公方満氏に反感を持つ満隆に、連係する様に申し入れた。

禪秀の乱

応永二十三年（一四一五）禪秀は直ちに、満隆及び持氏の弟、持仲等を語り、謀反の準備を進め廻状を廻して武士達を募つた。上野の岩松・北武藏の児玉・丹党・別府・玉井・瀬山。ミカ尻の武士が之に従う。一方武藏南部の江戸・豊島・品川等の諸氏は、持氏に従つた。

応永二十三年（一四二六）十月二日兩軍の戦鬪が始まった。持氏は敗れて小田原から駿河に逃れる。兼倉の実権は一時禪秀に握られた。然し、南武蔵の武士には依然として之に従はない者もあつたので、禪秀は、兵を卒いて南武蔵の討伐を企てた。

翌応永二十四年（一四二七）正月五日、世谷原で江戸・豊島及び南一揆の諸軍と決戦した。

禪秀重敗れて鎌倉に退く。之を追う南部軍の為に、満隆・持仲・禪秀以下自害して、この乱は終わった。

持氏は、將軍義持の兵隊を導き、之に對し、禪秀に味方した武士達の処分を行つた。之れにより、児玉・丹党等北武蔵の武士達の勢力は、益しく弱がれる事になる。

水原の乱の前提

禪秀の乱は、將軍義持の援助で、持氏方の勝利に終つたが、將軍との間は、反つて険悪化した。

將軍義持は、禪秀の三男意秋・四男教朝や禪秀に味方した武士達を保護した。

之に對し持氏は、禪秀に味方した、岩松・宇都宮・佐竹・山入・武田等を益しく討伐した為、京都方の扶持人の輩がほとんど滅亡したと云はれる。

応永三十三年（一四二三）八月將軍義量は、鞍馬に參詣し關東輔伏を祈願し、

翌応永三十一年（一四二四）關東に問責の使を派遣した。持氏は、將軍義量に對し、忠誠を誓つたので、一応終つたかに見えたが、その後も持氏は、甲斐の武田を討伐している。

三三の時武蔵七党の武士達が、秩父口から甲斐に攻め込み、武田氏を降伏させたと伝える。

応永三十二年（一二三二）將軍義量十九歳で病没。

父義持が再度び將軍となる。

三三の頃義持は、公方持氏に、將軍職を継嗣さすとの約束をしたと言う。

応永三十四年（一四二七）復讐二年後に、義持急死す。

持氏の將軍職相続を反對し、京都では管領畠山満家等が、義持の弟、義門を選俗させて將軍義教として奉成した。之により、持氏の義教に對する反感は、益々に強く、伊勢の國司北畠氏と反逆を企てたが、北畠が討伐されて大事には致らなかつた。

この年京都では、十一歳が暴発し、全国的に飢キンで鎌倉で二万人もの餓死者が出たと云う。

応永三十四年（一四二七）義教の將軍職就任式に公方持氏は、使者を出さなかつた。（持氏と將軍職を巡る対立）
正長元年（一四二八）の翌年は、永享元年と、年号変る。

永享元年（一四二九）公方持氏は京都に対する反感から、年号が變つても旧年号を使用した程であつた。やがて、持氏から將軍義教に、太刀や馬等を献上したが、依然として、持氏のワダカマリは解けなかつた。

永享四年（一四三二）將軍義教は、公方持氏を威圧する為に、富士見と称して、大軍を卒いて駿河に出張する。持氏も着々と関東掌握に努めた。

永享七年 常陸の長倉氏を討伐す。長倉氏は將軍家の扶持人。

永享八年（一四三五）信濃守護小笠原討伐軍を出そうとした、管領憲実は、持氏に、信濃は將軍家の分国であるとして強く中止させる。

◎この為持氏と管領上杉憲実との溝深まる。

永享十年（一四三八）持氏は長子賢王丸の元服式を鶴岡八幡宮で挙行したが、この時先例では、將軍に御使者を立て、將軍の名前の一字を賜わる例となつてゐる。管領憲実は強く之を主張したが、持氏は之を聞かずに勝手に義久と改名させた。

◎憲実は、上野白井城に引揚げてしまつた。持氏は直ちに、憲実討伐軍を出す。憲実は京都に援助を求めた。

永享の乱

永享十年（一四三八）將軍義教は、すぐ様持氏追討の倫旨を請い憲実援軍を派遣した。之を知つた関東の武將達は、多く憲実に従い、憲実軍は忽ち勢力を得て、鎌倉を攻めた。

持氏悌斐して謹慎の意を現わしたが、許されず、

翌永享十一年（一四三九）二月嗣子義久等と自尽した。永享の乱終る。

◎公方持氏の母は一色氏の出の為、この後、古河公方家の最後迄一色氏の活躍が見られる。この戦には小山結城一色は公方方として戦う。

結城の合戦

永享十二年（一四四〇）永享の乱の時、鎌倉を脱出した持氏の清見春王丸・安王丸は、一時日光に逃れたが、結城氏朝に迎えられて、結城城に籠る。之により武蔵東部で戦が始まった。

◎この戦の時新方庄は、どうであつたか、記述は見当らない。然し北葛飾郡は皆一様に結城方として戦つた事と察する。清浄院由緒書聞書にこの辺の事が、記されている。資料古志賀谷三号参照

管領上杉清方は直ちに、戸鼻和性順（憲信）家老長尾景仲等に討伐を命じた。性順は苦林野に、景仲は入間川に兵を進めた。

一方鎌倉を脱して、忍の成田に身を寄せていた持氏の外戚、一色伊予守は武州一揆を味方として、永享十二年七月、利根川を越えて須賀城を襲い之を攻め落した。一色動くの報に性順は迎撃した、一色軍は一時荒川を渡つて、村岡河原迄進出したが、性順景仲軍の反撃に合い、一色軍敗れて結城城に逃れる。

結城城は、その後一年間十万の大軍に包囲され、良く戦つたが、遂に春王丸安王丸永寿王丸の三人は捕えられ、結城氏朝以下討死して城落る。永享十三年（一四四一）嘉吉元年四月の事である。

◎清浄院由緒書聞書参照の事。

◎春王・安王の墓が北埼玉内多ヶ谷の龍興寺に有る。古河公方縁者の寺也。

◎越ヶ谷本町市神社の棟札に、嘉吉二年（一四四二）の記載あり。

春王丸・安王丸殺害

結城合戦の時捕えられた、三人の遺児達は、京都に送られたが、途中美濃国垂井で殺害さる。永寿王丸は当時八歳の為に一命を許されて、美濃の土岐氏に預けられた。後の古河公方成氏である。

◎禅秀の乱・永享の乱・結城の合戦と一連の合戦は、京都將軍家と鎌倉公方家との不和反目から起きた事件で、將軍側の勝利に終つた。

足利成氏関東公方となる

結城の合戦で捕えられたが、辛くも命を預けられた。永寿王丸は、美濃の土岐氏に預けられ、成長した。文安六年（一四四九）鎌倉は永享の乱（永享十年一四三八）以来、主なき時代が続いた。管領家では、長じた永寿王丸を関東の主として迎え度いと幕府に願出た。

京都では義教の次に義政が將軍と変つたので、永寿王丸に取つては、幸運であつた。永寿王丸は許されて鎌倉に帰り元服して成氏と名乗つた。

鎌倉では、上杉憲実が成氏の恨みを恐れて、伊豆に隠妻し、その子憲忠は幼少であつたが、將軍の命令にて管領職に付けられた。

◎永享の乱で父持氏兄義久、結城合戦で兄春王・安王が殺されている

宝徳元年（一四四九）、文安六年は改元される。

成氏は、父持氏の為に忠死した武士の子孫を召し出し、領地を与え、次第に邊疆を固めやうとした。之に対し、山ノ内上杉の家老長尾景仲、扇谷上杉の家老太田資清は、協力して公方成氏及び、その近臣を制圧しようとして、

宝徳二年（一四五〇）急に成氏の御殿を襲つた。成氏は、江の島に難を避れた。

千葉・宇都宮・小山等の加勢を得て鎌倉を回復する等の事件があつた。將軍の口添で両者和解したが、成氏は、長尾・太田に加担した武士の本領を没収した為、長尾景仲は、上野中心に密かに一族を糾合して、成氏襲撃を企てた。

成氏古河公方と成る

享徳三年（一四五四）十二月成氏は、急に鎌倉で管領憲忠を襲い之を殺した。

この為上野にいた長尾景仲・河越の扇谷上杉持朝・太田資清は共一千余人を率いて鎌倉に向つた。途中鎌倉方と戦い敗れて、上野河越に引退する。成氏は京都へ不当を訴える。

享徳四年（一四五五）正月上杉軍は再度武州へ進出、分倍河原で成氏と激戦上杉憲頼・扇谷頼房等が戦死した上杉大敗す。憲頼は神秀の子・頼房は持朝の子である。

享徳四年康正元年（一四五五）六月十六日將軍義政の命を受けた、駿河の今川が、大挙して鎌倉を攻める。成氏は鎌倉を逃れる。

享徳四年六月鎌倉を追われた成氏軍は、途中世谷（横浜市港区）にて南一揆に持伏せられるも、梁田等之を追散して騎西庄菅浦にて敗戦の兵を魚め、翌日田宮城（幸手町）にて評議の後成氏は、下河辺の城（元栗橋城）に入り梁田は関宿城へ野田右馬助は野田城へ、一色伊予守は田宮城に入る。

享徳四年七月改元して康正元年となる。成氏は、古河に本拠を構え以後、古河公方と称す。

康正元年（一四五五）十一月十三日原左衛門朗珍・同左京亮朗頭武州東方にて討死す。（越谷市東方）

康正元年十二月三日成氏は、武田・里見・梁田・一色等の兵を以て騎西城（私市城）を攻める。守る上杉・長尾の軍は城を出て合戦に及び、城中に引返す。同六日成氏新士の兵を繰出して激しく攻め落す。

康正二年正月十九日（一四五六）成氏は、梁田出羽守等の兵を以て、市川の城を数度攻め之を落す。千葉夷胤は武州石浜（台東区）に落、自胤は同国の赤塚城（板橋区）に移り、上総・下総の兵、大半は成氏に降る。この機に乗じて成氏は、関宿の梁田氏をして、武州に討て出て、足立郡の大半を押領す。

成氏鷲宮神社に、願文を発す。享徳五年二月十日（康正二年の事である）成氏は、上杉追討を祈っている。

願主 武蔵国大田庄 鷲宮大明神

右意趣者、天下泰平武運長久、特今度凶徒等悉く退治せしめ、本意に属するに於ては、足立郡・騎西郡の段踐を以て、当社の修造之為寄進上奉るべし。立願之状依如件

享徳五年二月十日

（康正二年一四五六）

左兵衛督

源朝臣

成氏

（花押）

鷲宮は、古河城を守る前面の最前據拠点であるので、恩賞を予約した願文であろうか。成氏は小山・結城の諸氏に常陸下野方面を押えさせ、下総の関宿には、重臣梁田氏を置き、東武下総の経営に当らせ、一時は、足立郡迄勢力を拡張した。◎吉川町の戸張家等は梁田家の家臣である。文書有り。

康正二年（一四五六）一方上杉氏は本領上野国と鎌倉とを結ぶ、西部一帯を確保する為に、先づ深谷城を上杉性順の子房頭に築かせ。

長祿元年（一四五七）には扇谷上杉持朝をして河越城を、その家老太田資清（道真）に岩槻城を、その子資長（道瀧）に江戸城を築かせた。

当時の城は少規模であつたが、深谷城は東に利根川とその湿地帯、岩槻城は、東に荒川とその湿地帯、河越城は、東方に人間川とその湿地帯を持ち、江戸城も東に荒川を控え、古河公方に対する充分要害の役をはたせる防衛拠点と思はれる。

◎康正元年六月將軍義政の命により、駿河の今川大挙して鎌倉を攻撃するに及び、公方成氏は鎌倉を捨て、古河に逃れ、こゝを拠点として根拠地を構えたので、以後古河公方と称する様になる。上杉に対するに、渡瀬川と利根川の二大河を前面防衛線として、一応守りに強い態勢を敷き、各処に城砦を修築して防備を堅めたのである。

康正二年十月十七日庁鼻和上杉武蔵入道性順・同息右馬助房頭、深谷城を取立て、人見原に打て出る時、成氏は烏山右京亮等の手勢を以て岡部原に之を攻め勝利を得るも、烏山氏深手を負つて死亡、成氏勢引返す。

康正三年（一四五七）四日將軍家は、渋川左衛門佐義鏡を武蔵国司として蔵に下向させ、上武の諸將に下知して、成氏を討取り上杉氏を管領と成し、関東を治むべし、と教書を下す。

康正三年四月扇谷上杉修理大夫持朝に河越城を、太田備中守入道道真に岩槻城を取立させ、同息左衛門大夫資長に江戸城を築城さす。

康正三年十月成氏古河城の修營成る。康正三年九月二十八日より長祿元年と改元す。

長祿元年十二月將軍家弟の左馬頭政智、還俗して伊豆堀越に下向し、堀越公方と称される。

長祿三年（一四五八）十月四日上杉兵部少輔房頭は、大田庄に乱入、久米原須賀（宮代町）にて成氏方一色氏と合

戦す、同十四日大田庄小野袋（北川辺村）にて再び合戦、上杉教房討死す 同月十六日上杉勢大田庄を退く。
同十九日上杉勢高野城下に攻め寄せせるが、合戦せず引揚げる。

長祿二年（一四四五）八月記銘鱒口 鷲宮神社所蔵

寛正二年（一四六一）十月十六日 俄に岩槻勢、成氏の前衝地点の高野浅間台城を急襲、城将一色防戦して之を追
払う。（吉羽系図・新井系図等）

◎寛正二年（一四六一）九月成氏と上杉方と越ヶ谷野に於て戦い、上杉方勝利す。（東松山 竹前弓神社縁起書）

◎越谷市神明下 元荒川の中の川洲より発見三十数枚一ヶ所より出土。

| | | | | | | | |
|------|--------|--------|------|-------|--------|--------|--------|
| 寛正二年 | （一四六一） | 一月二十四日 | 妙心禪尼 | 文明九年 | （一四七七） | 七月十八日 | 道□禪門 |
| 寛正三年 | （一四六二） | 九月五日 | 妙□禪尼 | 文明九年 | （一四七七） | | 妙慶禪尼 |
| 寛正七年 | （一四六六） | | 妙仙禪尼 | 文明七年 | （一四七五） | | 道光禪門 |
| 応仁元年 | （一四六七） | 五月八日 | 妙仙禪尼 | 文明十年 | （一四七八） | | 道妙禪門 |
| 応仁三年 | （一四六九） | | 妙叡禪尼 | 文明十八年 | （一四八六） | 二月吉日 | 逆修妙心禪尼 |
| 文明□巴 | | | 性祐禪門 | 文明十九年 | （一四八七） | 十月二十二日 | 妙心禪尼 |
| | | | | 文明十九年 | （一四八七） | | 迎妙禪門 |
| 康正三年 | （一四五七） | 七月三日 | 道金禪門 | 文明三年 | （一四七一） | 九月十二日 | 妙觀禪尼 |
| 康正三年 | （一四五七） | 四月九日 | 妙真禪尼 | 文明七年 | （一四七五） | 八日 | □□禪尼 |

古志賀谷氏の事跡に付いては、現在の処何一つ伝承していない。又鎌倉時代より南北朝期・室町時代迄好運とも言える程に、味方した方が生き残り、その名が消えずに残つて来た野与党は古河公方と上杉管領との争いの渦中に巻込まれ、丁度最前線の接点に置かれて、その名が消滅してしまつたものと思はれる。古志賀谷氏も勿論西軍の最前線の接点に抛す以上論外と云う訳には行かなかつた事である。箕谷総領家が、消えたと同じ頃、消滅したと考えられる。寛正二年越ヶ谷野に於て合戦の記述が想定出来る事件である。今一つの物証が望まれる所である。

寛正六年（一四六五）三月太田左衛門大夫資長上洛、將軍義政に謁見、名を持資と改める。

寛正六年十二月古河公方成氏、大田庄に陣張して、今川氏と合戦す。

寛正七年（一四六六）二月十一日成氏、五十子にて上杉房顕と合戦し、山内上杉兵部少輔房顕戦死す。
寛正七年二月二十八日改元して文正元年となる。

文正元年（一四六六）千葉勢の原豊前入道光胤、吉川にて討死、岩槻勢と戦う？

応仁元年（一四六七）京都では応仁の乱始る。文明六年迄続く。

応仁三年（一四六九）六月記銘十三仏板碑、下河辺庄下方銚子口に建つ。（春日部市）

◎越谷天嶽寺開基。文明二年（一四七〇）大旦那太田下野守。

文明三年（一四七二）五月十三日長尾昌信及び岩槻勢、成氏を攻めるべく、高野城に押寄せせる。一色氏兼、防戦するも、内応者多く落城し、関宿城に落ちのびる。

文明三年六月二十四日上杉勢、古河城を攻める成氏は千葉孝胤を頼り、上総に逃れる。（荒井・吉羽系図）

上杉氏、五十子の陣より出兵、成氏方与党を所々に降す。

太田図書資忠、主扇谷政実の命にて、下野国佐野氏を降し、館林城を攻め落す。

◎文明三年十一月記銘、十三仏逆修板碑、新方庄増林に建つ。

文明四年（一四七二）二月古河公方成氏、野田右馬助・梁田出羽守・菖菑の佐々木氏等の助力を以て、千葉康胤の所より、古河城に復帰す。

◎文明五年（一四七三）民部阿（高城氏）吉川にて討死、本土寺過去帳

◎文明五年十二月九日多門坊の弟左京阿（高城氏）吉川にて討死、本土寺過去帳

文明五年十一月二十四日扇谷上杉政真、成氏の軍に攻められ討死、享年二十四歳、扇谷持朝の三子定正を老臣等評議して、修理大夫に任じて、扇谷上杉の家督を継がしむ。

成氏と上杉との抗争

深谷・河越・岩槻・江戸の各城の築修築城を終えた長祿元年春より、上杉方の攻撃が始まるが、一進一退で、武蔵各地で戦鬪が行なはれている。その中で最も激しく有名なのは、長祿元年(一四五七)寛正七年(一四六六)文明五年(一四七三)古河公方と上杉との激鬪、五十五の戦である。 (本庄市) 三回にわたる大激戦は、東に利根川と湿地をひかえた台地で、上野と鎌倉を結ぶ要衝の地である。三度に渡る大きな戦で、寛正七年には、禅秀の子管領上杉房頼、文明五年の時は扇谷政実(持朝の孫)が戦死している。上杉氏は上野へ鎌倉の大動脈を死守した事がうかがわれる。

応仁の乱 関東で激鬪が続く間に、京都では、応仁の乱が勃発した。応仁元年(一四六七)五月より文明六年迄続く。

長尾景春の反乱

関東では、山ノ内上杉家家老長尾氏の分裂の事態が発生した。山ノ内家の石柱長尾昌賢(昌信)の死後、山ノ内頼定は昌賢の弟忠景(景茂)を家老とした。昌賢の子景春は、之を不服として、五十子在陣の主家に反旗を翻そうとした。景春は鉢形城に移り、戦備を整えた。太田道灌之を思い止まる様説得するも聞かず。

文明八年(道灌が、今川家の内紛を鎮めん為駿河に出張を命ぜられ武蔵を空けたすき突いて五十子に押し寄せたので)上杉方は、翌文明九年(一四七七)正月五十子を捨て、上野へ退き再起を計った。

豊島氏景春に応ず

道灌江戸に帰ると、之を押える為、景春は豊島を後援して、石神井及び練馬の城を強化させ、江戸へ河越間の道を塞いだ。

道灌は、之に対抗させる為、河越と江戸城を堅固にし、景春方の武蔵相模の諸城を攻撃し、総て道灌側の勢となつた。勝呂原(坂戸)の合戦は有名である。同年五月には管領上杉頼定等を五十子の陣所へ迎へ入れた。

◎文明九年四月十四日江古田原の合戦道灌大勝利。

◎同四月十八日石神井城落し、豊島泰経・泰明討死して豊島氏亡ぶ。

景春、榛沢に陣を張っていたので、道灌は、鉢形との連絡路を襲い、用土ヶ原で合戦した。景春敗れて鉢形城に退く

成氏・景春に応ず。

文明九年(一四七七)七月公方成氏、景春を援ける為滝に出陣す。(本庄市滝瀬) 道灌は、上杉勢共々上野白井城へ引挙げた。上野瀬田郡にて合戦す。

公方の仲介で上杉と長尾和解す。

文明十年（一四七八）正月公方の老臣梁田氏が、上杉・長尾との和解を申入れ、成立したので、道灌父子は上杉定政を伴つて河越に帰城する。公方も田宮城へ退く。

景春は和解後も動き、小競り合いが続き、河越の北浅羽（坂戸）に陣す、道灌直ちに陣之を退散さす。景春古河方の成田に逃るもやがて退散す。

文明十年七月白井城の山ノ内上杉顕定を鉢形城に迎入れる。

景春、長井城（妻沼町）に居たが、秩父に移る。

文明十一年（一四七九）十二月道灌は景春討伐の為に、金鑽談所（神川村）に着陣したが、成田方面（行田市）で不隠の噂が流れたので、道灌は、引返して、成田親泰を後権したので忍方面は平静に返つた。

◎長井城の輩の動きか。

文明十二年（一四八〇）正月以来景春は越生方面に兵を動かす。道灌の父道真が直ちに兵を差向け、景春軍を退散さす。文明十二年（一四八〇）道灌は、景春一味に味方した長井城を攻略した後、秩父に向う。日野城（荒川村）を攻めて遂に、景春を降伏させた。

◎景春の反乱は五年目でようよう鎮圧出来た。

◎成氏と和解し。豊島氏を滅亡させ、景春を降伏させた道灌にも、ようよう平癒の日々が来た。

太田道灌謀殺さる。

山ノ内上杉顕定や、長尾忠景等は始めから景春討伐には手を借そうとしなかつた。道灌が次第に強大になり、その名勢が高くなる程、次第にうとましく主家がおびやかされるとの危惧の念を抱く様になつて来た。又扇谷上杉定政も他の家臣のザンゲンもあり、あまりの強さの為に、道灌に対し次第に不快の念を持つ様になつて来た。

文明十八年（一四八六）定政は、顕定の進言もあつて、道灌を相州糟谷の館に於て（伊勢原市）殺害してしまつた。道灌五十五歳であつた。殺した主君は、暗愚のそしりを免れ得無いであらう。

道灌の死によつて、関東には再び、険悪な空気が流れ始めた。

◎永享の乱の後。持氏義久の自刃。結城の合戦で春王安王の殺害されて唯一人命を預けられて長じた成氏が、やがて関東公方となり、鎌倉を追はれて、古河公方となり、一貫して上杉討伐に明け暮れ戦乱止む処を知らずであつた。

◎文明八年一四七六。長尾景春の反乱により、上杉は古河と景春の両面の敵に対して、唯一人道灌の活躍が輝き過ぎた為、うとましがられて、殺された。

◎道灌の死により、関東の力の均衡が破れ、再び動乱の日が来る事になる。

◎山ノ内上杉と扇谷上杉との不和抗争が始まる。互に戦力が弱まり、弱態化して行く間に、新たな強敵が次第に頭角を表わして来たが、小田原に地歩を固めつゝある北条早雲である。

◎長祿元年より始まる。上杉方の太田・長尾の、古河成氏への攻撃は、利根川の自然防御線の為に、一時的には、侵攻出来ても、長祿の古河は困難であつた事であるうか、決定打撃とはならず、武蔵の各地で大きな犠牲のもとに、相方共、血みじろの戦が繰返えされた。

◎古志賀谷氏。野与党に名を連ねている箕勾・須久毛・加倉・江ヶ崎・佐那賀谷・鬼窪・白岡等々鎌倉期、南北朝期等に有名な氏族が消滅した。古河公方成氏と管領上杉との確執、強いて言えば、京都勢力と関東公方との不和反目の争いの渦中に巻込まれての犠牲ではないか、との感を深くする時期である。

◎上杉方太田道灌の活躍で、古志賀谷氏始め、野与党の氏族が亡んだであろう時期より、九年目文明二年に越谷天嶽寺が、太田下野守大旦那として開基しているのも、成氏を攻めるべく一番充実した安定した時期であるので、当然あり得べき時期であり、又越ヶ谷地区が完全に道灌の下に組込まれた事を意味するものである。

両上杉の内紛

文明十八年（一四八六）太田道灌の死後、扇谷上杉定政の処置に憤った息太田資康は、山ノ内上杉顕定に心を寄せる様になる。山ノ内上杉に対抗している長尾景春は、扇谷と手を結び、又太田氏に圧迫され。

長享二年（一四八八）両上杉対立以来、関東各地で戦いが繰返えされたが、菅谷原の合戦や（嵐山）高見原の合戦（小川町）では、数百もの戦死者を出す激戦があつた。その後も度々小競り合いが続いたが、この間に、太田道真・扇谷上杉定政五十一歳・古河公方或氏六十四歳等が相次いで没した。

北条早雲の台頭

駿河今川の食客であつた、伊勢新九郎長氏は今川氏の内紛に乗じて勢力を得、始め興國城主となる。

延徳三年（一四九一）伊豆堀越公方茶々丸を襲い殺した。伊豆を手中に収めた。

明応四年（一四九五）小田原の大森氏頼の死後に乗じて、城を乗取り、城主を追出し小田原城は、早雲の持城となる。

伊豆・相模小田原を手中に収めた伊勢新九郎は、北条早雲と名を改める。小田原を拠点として関東をうかがう。

明応三年（一四九四）九月先に小田原の大森氏頼を失い、又々三浦時高の両将を失つた扇谷上杉定政は態勢を挽回すべく北条早雲の力を借りて、高見原に戦い、この陣中で定政没したので、扇谷軍大敗した。早雲も伊豆へ引揚げる。

◎明応四年（一四九五）本土寺過去帳、ヤトミ瑞応位同正位、東方にて討死（越谷市東方か？）註、越谷市東方中村千枝氏宅々地内と溝外北東側に塚有り、今は崩されて平地となる。

明応六年（一四九七）足利公方或氏左兵衛督、行年六十四歳没。政氏相続

明応十年（一五〇一）この年文龜元年となる。

文龜四年（一五〇四）八条兵衛尉は新方を攻め、新方頼希防戦するも、小林郷にて討死為に、新方敗北、新方は八条のものとなり、別府三郎に向畑城を守らしむ。

◎八条（八潮市）。上杉八条家の名見える。野与党八条との関係は不明、深谷上杉系図に有り。現在八条に八条殿社跡と云う有り、又同所に塚有り中より板碑の出土あるを記す。

◎文龜四年（一五〇四）吉河大式、下内川（吉川町）の正覺寺を起立す。

◎文龜四年本土寺過去帳、道敷似、吉河大式・道中位吉川大式。

◎文龜四年本土寺過去帳左京阿日慶逆修、民部阿日誓逆修、吉河大式これは生前供養の為行なはれたものと思はれる。文龜四年この年永正元年と改元す。

永正元年（一五〇四）九月両上杉は依然として激戦が続き、中でも立川原（東京）の合戦は山ノ内顕定を討たんと、扇谷朝良は、北条早雲、今川氏親の援を得て、両軍死力を尽して戦つたが互角に終つた。

同十二月越後上杉の助けを得た山ノ内が勝つた。扇谷は河越に引籠つた。

◎越後守護職上杉房能は、顕定の弟、家老長尾為景は（謙信の父）この戦に加わっている。

両上杉和議成立

永正二年両上杉の不和の為十七年間の永きに渡る合戦に明け暮れた両上杉も扇谷の敗色により、和議が成立し、対北条の重要性に気が付いたが、時すでに遅く、あまりにも傷付き過ぎた。

永正二年（一五〇五）三月朝良は河越城を明渡して江戸城に帰り、家督を朝興に譲る。

永正四年（一五〇七）古河公方政氏は息子高基と不和となり合戦となり、政氏は小山頼長を頼り走る。後久喜甘菜院に引隠す。

越後長尾の反逆

永正五年（一五〇八）越後守護職上杉房能は、家老の長尾為景に殺される事件があつた。

永正六年（一五〇九）越後守護代長尾為景を討たんが為、上杉顕定父子は、弟房能の弔合戦とて、越後に出撃す。

永正七年（一五一〇）七月二十日越後長森にて、長尾為景と戦い、顕定敗死す。子管領憲房は、上州平井へ逃げ帰る。顕定享年五十七歳没。顕定の死により関東平野に新たな戦雲が立ち始める。

永正六年（一五〇九）この年に記された、連歌師紫屋軒宗長と云う者の旅行歌日記「東路の都登」に小岩善達寺の附近に住いを持つ、会田弾正忠定祐の家で連歌を催したと記されている。（小田原所領役帳に出て来る会田氏か）

管領頭房の逃げるを直ちに追撃した長尾為景は、扇谷上杉に身を寄せていた、長尾景春入道伊玄と結び、景春は時至れりと、為景の催に応じ、沼田王に布陣す。

三浦氏の滅亡

永正九年（一五一一）八月北条早雲は、相州岡崎城主三浦義同入道道寸を攻める、岡崎城落、道寸住吉城に逃る。（逗子小坪）北条早雲住吉城攻る。道寸、息子の抛る新井の域に入る。早雲は新井城を攻撃する為の、陽動として上田政盛に反旗を翻させた。

永正九年（一五一一）七月上杉の臣、上田蔵人政盛謀反して、早雲に通ず。神奈川権現山城に籠城す。上杉朝良入道大將として、之を攻め、上田を城より逐電さす。永正十年（一五一二）早雲鎌倉に入り。相州一円に勢力を伸張す。玉繩に城を築き、相州の守りとして、関東制覇の前後拠点とす。

永正十年（一五一二）上杉朝興江戸を陥し、玉繩を抜かんとす。激しく攻めるも打敗かされて、江戸城に逃げ帰る。

永正十年九月二十九日江戸太田資康、扇谷上杉の名代として、三浦道寸を支援して、北条軍と戦い、三浦衣笠城にて討死す。◎太田資康は、三浦義同入道道寸の娘の婿である。息資高家督を相続す。

◎永正十二年（一五一一）五月一日（千葉勢）原弾正鳴谷にて討死す。本土寺過去帳

◎永正十四年（一四一七）四月二十八日、高城治部小輔、番匠免にて討死す。（三郷市、千葉勢の將）本土寺過去帳

三浦の新井城落城す。

永正十三年（一五一六）七月十一日三年にわたる遠城の末、遂に落城す。

この時、江戸より上杉朝興、再度三浦を支援の為、出陣北条と激戦の末遂に敗れて引退る。北条も退くこの時急に、三浦の新井城を攻める。三浦安房へ逃れる事を勧められるが、城を調いて打て出て、三浦義同、息荒次郎討死す。三浦氏これにて滅亡す。

◎義同、扇谷持朝の二子、修理亮高教の二子にて、三浦時高の養子となる。時高遅れて実子出来た為、之に嗣せたく義同と争となる。義同岡崎城に出るも、時高父子を襲い殺す。新井城に息荒次郎を置く。

北条早雲没す。

永正十六年（一五一七）北条早雲没す、八十二歳

新方城奪還

新方庄の地下人、十六年前、誇西庄八条兵衛に押領された新方の地を奪回すべく、向畑城（越谷市向畑）に逆襲す。城將別府三郎を討取り、城を奪還す。

八条勢敗北す。

永正十八年（一五二一）正月六日八条兵衛、再び兵を進めて、新方の地を掠め取らんとす。新方勢太田の支援を得て之を撃退す。八条軍敗走す。

◎会報第三号、屋陰の八ツ塚の項参照

永正十八年は大永元年と改元す。

太田資家没す。

大永元年（一五二一）一月十六日岩槻城主太田資家没す。七十五歳。嫡子資頼家督を相続岩槻城主となる。

北条氏 武蔵 侵攻

北条氏が本格的に武蔵の経営に乗出したのは、大永四年（一五二四）からである。

氏綱の娘、古河晴氏に嫁す。

北条氏綱は、江戸城を押える為に、古河公方と連係を取り、策してその娘を公方高基の息晴氏に嫁がせる。

北条氏を名乗る初見

大永二年（一五二二）九月相州寒川神社の再建の棟札に「相州大守北条新九郎氏綱」と署名した。北条の名前を使用した初見である。

江戸城落つ

大永四年(一五二四)正月、江戸太田資高、北条氏綱に内応す。氏綱江戸を攻める。上杉朝興城を出て高繩原にて合戦す。朝興方敗れて江戸城に引く時、城内にて、太田資高叛旗を翻えす。上杉朝興江戸城を捨て、河越に落る。江戸城は北条氏綱の城となる。

大永四年十月山内憲房、江戸城奪回すべく、上・武の兵を集め、上州平井より出馬鉢形に陣す。毛呂城攻る。毛呂太郎江戸城落る時氏綱に与す。氏綱毛呂を援くるも、憲房と和議して、毛呂城を明渡して、江戸城に引返す。憲房も引揚る。

岩槻城落る

大永五年(一五二五)岩槻城内に渋江三郎、氏綱に通ず、氏綱岩槻城攻める。城主太田資頼、敗れて石戸城に逃れる。岩槻城は、北条氏綱の持となる。

大永五年三月岩槻方石見守の守る、葛西城を攻め落す。これにより国府台城に対する事となる。葛西城落つ

上杉憲房没す

山ノ内上杉憲房没す。足利高基の子憲広が前々よりの約束により、管領職を継ぐ、幼少の為、長尾・大石・藤田・小幡等の重臣が山ノ内家を守る。◎高基は、氏綱の援にて、父政氏を追放、息晴氏の嫁に氏綱の娘をもらう。

大永五年六月岩槻城奪還戦、続くも追放らさる。

葛浦城落つ。

岩槻城奪回戦失敗により、葛浦城落ちる。上杉憲救、之を奪回すべく攻めるも、岩槻より渋江の応援により敗退す。

享祿二年(一五二九)四月太田資頼・上杉朝興は、吉野原にて合戦す、この時太田資高と戦う。資頼・朝興軍敗れる。

◎この時、太田資高岩槻城より出陣と岩付巻談にあり。

岩槻城奪還

享録三年（一五三〇）小沢原にて合戦あり。上杉朝興河越より出兵、北条氏綱・氏康父子と戦う。上杉方敗れる。氏康初陣十六歳と。

太田資高小沢原合戦の時陣中に在る留守に、太田資頼石戸城より岩槻城を攻める。守将渋江三郎を討取り岩槻城を奪還する。五年の歳月を要した。※新編武蔵風土記稿

享録五年（一五三二）を以て天文元年と改元す。

天文二年（一五三三）岩槻城主太田資頼、子資時に家督を譲る。六十一歳。加倉の洞雲寺に隠居す。

※一説に太田資時、岩槻を与奪し、資頼隠居とある。又、子資時とあるが実は、江戸太田資高の弟であつて北条方である。

天文四年（一五三四）九月北条氏綱、河越城を攻めるも落ちず。

公方高基没す

天文四年（一五三四）十月古河公方足利高基没す。晴氏家督相続す。

天文五年（一五三五）太田資頼卒す。

河越城落つ 上杉朝興卒す。

天文六年（一五三六）扇谷朝興、河越城にあつて、江戸城の回復の爲鋭意努めたが、目的を果さず没す。

跡を継ぐ朝定十三歳、父の遺言により仏事もせず北条討伐の軍を派遣した。入間郡三木（狭山市）で北条と戦い大敗す。河越城に逃げ帰るが、遂に河越城も保つ事が出来ず、松山城に退く。（吉見）北条軍は直ちに松山城をも攻める。朝定は、城将難波田氏と共に、上野の山ノ内憲政のもとに逃れる。

かくて、河越城・松山城は、北条氏綱の持となる。氏綱は、河越城を家臣福島綱成に守らしむ。

葛西城攻める

天文七年（一五三八）二月氏綱、葛西城攻め落す。◎大永五年に葛西城を落してより、十二年目となる。

河越城奪還成不

天文七年（一五三八）七月上杉朝定、河越城奪回すべく攻める。氏綱之と戦い、上杉朝定敗れる。

国府台の合戦

天文七年（一五三八）十月二日氏綱、小田原を発し江戸城着。国府台城を攻める。生実御所足利義明は、里見義暁を擁して、関東に潮を唱えるべき野望を抱き、国府台に拠す。義明父子敗れて致死す。

◎永正十四年（一五一七）古河公方高基と不和となり、（義明は高基の弟）千葉に逃れ、武田信勝の援助で生実城に入城、以来生実御所（小弓公方）と云う。古河公方の代りに鎌倉公方になる野望を抱く。

大串の合戦

天文八年（一五三九）上杉管領憲政と古河公方晴氏と武蔵大串（言見）で合戦あり。管領上杉大敗す。

氏綱没す。

天文十年（一五四二）北条氏綱没す。氏康家督を相続す。

河越夜戦

武蔵国に於ける決定的、上杉勢力の崩壊は、この河越夜戦の敗北からである。

天文十四年（一五四五）九月上野の上杉憲政は、駿河の今川義元と呼応し、北条討伐に乗り出した。古河公方晴氏にも要請して河越城奪還の攻囲軍に参加させた。

◎晴氏は氏綱の娘を嫁に取る。この時期氏綱の死で連絡が弱いか。

十万余の大軍で、攻囲する河越城守備軍は、福島綱成守る三千八百、良く奮闘して大軍を支えたので、城は容易に落

ちなかつた。

天文十五年（一五四六）北城氏康、河越城救援の爲、玉繩より出張して、和平を交渉したが成功せず、遂に上杉軍攻撃する事とし、

天文十五年四月二十日夜突然上杉軍に夜襲を懸けた。北条軍八千による夜襲で、上杉軍は大敗北を喫し、扇谷上杉朝定・難波田氏等家臣、多数散逸した。之により扇谷上杉家は断絶し、家臣の大石氏・鎌田氏等扇谷の有力武士が北条氏康に従つた。上杉謙政・古河實氏・今川義元等皆根拠地に引揚げた。

◎上杉氏、之の戦の敗北で、再び武藏をうかがう力が無くなつた。

◎北条氏の武藏支配が決定的となる。

河越城に、北条方大道寺殿河守を、松山城に堀和刑部少輔を置き、上杉方に備えた。

松山城奪回

天文十五年（一五四六）八月太田資正は上田政広と語り、松山城を奪還する。資正の持となる。

資正、岩槻城主となる。

天文十五年十月太田資時、死亡により、資正城主となる。

同 十月下旬、資時の死を聞いた氏康は、直ちに出兵す。松山城、上田政広の内応により落城、北条の持。

◎太田資時は、北条方である証である。先に天文二年資頼が資時に家督を譲る時、息資時とあるが、新編武藏風土記には与奪とあり、上杉方の資頼が北条方の江戸太田資高の弟資時に、北条の圧力により譲与したと見るべきであり、この度は、資時急死により、資正が岩槻城主を継ぐとあるも、上杉方の資正が岩槻城主となつた事は不自然であり、直後氏康が岩槻に出兵している事が、この関の事情も物語っている。天文二年に、息資時とあれば、弟資正であり、兩人共上杉方であるはずである。この度は資正が、資時から与奪したと見るべきである。

◎太田資時に付いて、論議があるが江戸太田系図に資高・資時・資貞の兄弟有り、岩槻城が北城の持の時、岩槻巷談によれば、資高城主で北条方として出兵している。享祿三年資頼岩付城奪還して三年、天文二年に資時に家督を譲る。迺か河越の夜戦には上杉方に名前が無いし動いていない。資正は上杉方で奮戦している。

太田資正時代

河越夜戦(天文十五年四月) 十万余の上杉方包圍軍に対し、これを受ける三千八百の城兵、氏康の手兵八千との夜戦で、上杉方の戦死者一万三千であったと云はれる。

同 八月、太田資正、松山城奪回し、同 十月、岩槻城主資正の急死により岩槻城を継ぎ、資正城主となる。

同 十月末、北条氏康岩槻に出兵、松山城落し、再び北条の持となる。

天文十六年十二月、氏康岩槻城を襲う。翌十七年正月、氏康と資正は和議する。この時資正の長子氏資と氏康の娘と婚約成る。氏資六歳・氏康の娘三歳。氏康囲を解いて引揚げる。

◎後に三楽齋資正の岩槻城追放の遠因となる。

天文十五年(一五四六) 北条氏康、資正卒すの報に直ちに岩槻に出兵、松山城を攻める。城將広沢忠信防戦するも、二の丸の上田広政、氏康に内応するにより、落城広沢忠信討死し、松山城は再び北条の持となる。

松山城落る。

江戸太田資高没

天文十六年(一五四七) 七月二十四日江戸太田資高卒す、康資家督を相続す。

天文十六年(一五四七) 十二月氏康、岩槻城を襲う。

太田資正、氏康と和議す

天文十七年(一五四八) 正月太田資正と北条氏資和議す。この時資正の長子氏資(六歳)と氏康の娘と婚約成る。氏康囲を解いて退く。

◎天文十八年(一五四九) この年ポルトガルよりキリスト教伝来す。

神流川の合戦

天文二十年（一五五二）北条氏康二万余の軍にて小田原発進し、上武国境の神流川で決戦す。上杉方太田・長野・両毛の兵善戦するも、切返されて敗北す。

憲政、景虎に管領職譲る

上杉憲政は越後春日山に逃ぎ、長尾景虎に管領職を譲り、上杉家の家督を譲与する。

平井城落る

天文二十年（一五五二）八月氏康は上州平井城を攻め落す。憲政の子龍若丸捕わる。

長尾景虎、関東に出馬

平井城奪回

天文二十一年（一五五三）長尾景虎は、北条長綱守る平井城を攻める。上杉憲政の委頼による。平井城奪還なる。

長尾景虎諸將に和を乞う

天文二十二年（一五五三）長尾景虎、再び関東に出馬、諸將に書を送り和を乞う。上・下野の諸將と盟約成る。

村岡河原の合戦

景虎は、古河公方晴氏を討んとす。古河の諸勢は、千葉利胤の援を得て、村岡河原にて合戦す、千葉勢二千余騎討取られて敗走す。太田資正活躍す。

天文二十二年（一五五三）武田信玄、中信濃へ侵攻し、会田氏の虚空蔵山城落る。

越谷会田氏の出自

天文二十二年（一五五二）三月、甲斐の武田信玄、信濃小笠原の外郭小県郡より、東筑摩郡に侵攻、松本の小笠原に対す。この時會田氏の城虚空蔵山城落つ。越ヶ谷瓜のツル「元來會田出羽事者、海野小太郎子孫而、信州會田自」と云われる理由の合戦である。會田氏は同七月、謙信の援にて會田の城の奪回を企てゝいる。

氏康、今川を攻める

天文二十三年（一五五四）氏康、駿河今川を攻める。氏康出馬の時太田康資（江戸）武名を挙げる。二十五歳。

三國同盟成る

天文二十三年（一五五四）氏康は、今川氏を攻める、この時駿河の今川・甲斐の武田・相模の北条氏康は、三國同盟を約す。武田・北条共に対上杉謙信の為の戦略か？

この年氏康は、古河公方晴氏を討伐する事を企てる。◎晴氏の室に氏綱の女が嫁し、息義氏が成長した。先の河越の夜戦の時、晴氏は上杉に味方し、氏康の催促に応じなかつた事に起因する。

氏康、公方晴氏を攻る

天文二十三年（一五五四）氏康は、古河公方晴氏の討伐を計る。七千の兵を向ける。晴氏は藤氏と小田原軍に対す。同十月一日北条軍は、田宮城・高野城・天神島砦・永福寺等落る。四日古河城落る。

晴氏捕れて隠居す

天文二十三年（一五五四）十月、氏康、晴氏討伐を企て、七千の兵を向ける。晴氏は、藤氏と小田原勢に対す。北条斐、田宮城・高野浅間台・天神島砦・永福寺城落し、同四日古河城に入り、晴氏、藤氏を捕える。古河城は北条の持となる。晴氏・藤氏は相州漆野に籠められ、隠居させられる。同十二月晴氏親子は、関宿城へ、梁田政信は古河城に入る。看視付か？

天文二十四年は、弘治と改元す。

資正愛心の風聞

弘治二年（一五五六）六月景虎、平井城に入る時太田資正、小田原に通ずの風聞有り、景虎、子氏資人質となす。

弘治三年（一五五七）五月小田原勢、岩槻城を攻める。資正防戦。景虎上州に出馬の報に罎を解き上州に向う。太田資正、小田原との和睦の破壊か。

○永禄二年（一五五九）の小田原所領侵襲に、他国衆として、岩槻城主資正と載る。弘治二年の資正小田原に通ずとの風聞は真実であつたか？ 戦国武将の生き抜く為の苦悩が良く表われた所であり、又北条の戦略の巧みさが感じられ、開闢戦略と活動作戦、謀略と内通により侵略する戦術が良く現われている。

弘治四年は、改元して永禄元年となる。

足利義氏、小田原参上

永禄元年（一五五八）三月義氏小田原に参上、鶴岡八幡に詣でる。一色伊予守直勝供奉人。この後義氏を関宿城へ。梁田を古河城に移される。

| | | | | | | |
|-----|---|------------|---|---|---|-------|
| ※藤氏 | 一 | 梁田晴助の女に生れる | 一 | 一 | 一 | 梁田・里見 |
| 義氏 | 一 | 氏康の女から生れる | 一 | 一 | 一 | 氏康 |
| 輝氏 | 一 | 一色氏の女から生れる | 一 | 一 | 一 | 一色・結城 |

輝虎、管領就任式の準備

永禄元年（一五五八）謙信（輝虎改メ）常陸・両毛を攻める。資正の仲介にて、諸將謙信に降りて盟約を結ぶ。

長尾景虎は、永禄元年（一五五八）資正の仲介で、両毛諸將と盟約を結ぶ。正月、氏康は直ちに江戸・葛西の兵を主に三万五千の兵を以て、上州に対抗させ、各城を攻め、佐野城を囲み、一方で上州に対せしめた。佐野城危しに景虎八千の手兵を以て救援に向い、激溝観の中馬廻り十六騎を以て佐野昌綱の守る佐野城に救援の為走り入るを見て、小田原勢引揚る。

◎別説有り昌綱の妻は、景虎のかねての恋人であつたが、結ばれなかつた人であると。景虎の人間性が見られる。

景虎、(永祿二年五月)上洛將軍義輝より管領職を与えられ、輝の一字を賜う。同十月、上野に進出、厩橋城を奪い、武藏進出の準備に掛る。岩槻太田資正呼応して勢力挽回に努め、松山城を奪回し、寿能城を築く。成田始め北武藏の地侍達皆之に従う。長尾景虎、輝虎と改める。

織田信長、今川義元を討取る。勢力地図変る。

謙信、管領就任式挙行

永祿四年三月輝虎は、上下野州・武藏の兵を従え、大挙小田原方の城を奪い乍ら小田原城に向い進撃した。北条方退いて時久戦を計る。輝虎小田原を囲みて押え、封じて置き、鎌倉にて関東管領職の就任式を関東諸将の前で挙行無事終了すると、早々に上州に引揚る。

川中島の合戦、永祿四年九月、第四回目の合戦が行なはれた。武田軍三千騎、上杉軍五千騎の討死者を出しての大激戦であつた。

同 十二月、北条勢大挙して松山城に押懸る。翌正月、岩槻城・寿能城も同様で、松山城救援出来ず三月三日落城。上杉謙信、越後より馳付けるが間に逢はず、落城す、謙信石戸城を救援す。成田の城私市城を落し、成田と和す。

◎管領就任式の時の不和による。

◎太田三樂齋資正、北条氏の為に、次第に圧迫される。謙信、川中島の合戦の傷手大きい。関東管領の就任の為に利用したか、謙信の関東進出が少くなる。

◎末田金剛院伝によれば、謙信関東出馬の帰路、金子無く金剛院で借金した、その際に謙信の武具一式を借金方に置いて行き、後に返金の際に、記念に残して行つたもので、寺の火災の際焼失してしまつたとあり、今も春日山の謙信の持仏堂は、金剛院の持となつてゐる。

永祿六年(一五六二)太田三樂齋資正、北条氏の為に次第と圧迫せらる。越後の謙信、川中島の傷大きい。同十二月江戸太田康資、謀叛を企て、事成らず岩槻に逃れる。

国府台の合戦 (永祿七年正月) 太田資正は、里見義弘と呼応して、国府台城に籠る。初戦には遠山左衛門尉を討取り、勝利に気を許したる所、その夜の夜襲により里見・太田の軍は大敗北する。里見義弘、安房に退き、三樂齋資正、岩槻へ逃げ帰る。この戦で、三樂齋の手兵のほとんどを失うと云う。俗に岩槻三千騎と云はれていたがこの時岩槻に帰つた兵、七八百と云はれる。国府台合戦に討取られた者、三千八百と関八州古戦録に見える。

永祿七年（一五六二）五月、岩槻城は三楽斎の毛利兵の無い城となつてしまひ、北条の言う尽であつたであらうか。氏康と資正と天文十七年和議した際の約束により、息氏資と氏康の女との婚儀が行なはれた。

三楽斎資正・岩槻城家父子（叔資は氏資の異母弟で資正は特に可愛がつた）は、江戸太田康資と共に、氏資の手者に同七月追放された。岩槻を追放された資正は、一時宇都宮に寄食したが、後佐竹氏に迎えられる。常陸片野城を与えられる。三楽斎はその等岩槻城奪還に腐心するも、遂に復帰成らず、天正十八年九月八日片野城にて、風雲の一生を閉する。

◎越谷地方は、三来岩槻城付の地であるので、城主が上杉方か、北城方かはその根柢より異なるはずである。岩槻三千騎時代の普卒は太多討死しているが、その家系は後退し、變つて小田原北条家臣団が越谷周辺に、新恩給の地として入部して来る。

◎本田家文書、永祿五年に「前々依約束り約東との、舍人・越谷は大郷であるので、今後重々走廻る事肝要」との文書有り。岩槻太田支配の内から、この様な文書が出て、いる事に注目したい。

◎北条家臣の会田家・妻塚の山崎家・八条南馬場の浜野家等の家系図中に、北条氏邦に属すとか、氏房に従とかの記載でその間の事情を推察する事が出来る。

◎越ヶ谷会田家、越ヶ谷瓜のツルの中に、「中町会田出羽義は、天正以前海野小太郎、信州会田より郎等六家同道にて而罷越候大家にて而御殿高場にて陣屋住居致、云々」又「中町大屋敷会田五郎兵衛義、中略、元来会田出羽事は海野小太郎之子孫にて而信州会田より、天正年中越ヶ谷村へ執居、越ヶ谷領一円に所持致居候処、云々」。又静岡会田家系図によれば、「会田出羽資清、父將監相伴自信州到武州越ヶ谷、而居住こそ、往年因太田美濃守資政後号三楽斎、常々三楽与会田氏加懇意而親故授資之字、依自是子孫用資之字云々、」

◎之等断片的記載にて明確では無いが、越ヶ谷会田家は、信州会田郷より天正以前に武州越ヶ谷に六家同道にて罷越、越ヶ谷一円を所持致して、御殿高場に陣屋住居致大家にして、先祖は海野小太郎である。岩槻城主太田三楽斎資政と加懇意に因り、親しき故に資之字を授かり、子孫は依り資之字を用うと云う事になり、上杉方の太田資正に属した事となる。

◎天正年中越ヶ谷村に執居、とあるは、資正追放されて三年、氏資が五十三名の者と共に、上総にて討死し名実共に北条の支配となる永祿十年以後旧岩槻衆は後退して、執居、等と云う形となり、之等の所領を召上げて、北条家臣の功有る者に新恩給した事が理解出来る。

◎北条家臣としての兵衛を持つ、会田・浜野・中村等之等事情を物語っている。

太田氏資討死 (永禄十年一五六七) 北条勢、安房・里見討伐の時 上総三船城外に於て家臣五十三名と共に討死す。是に依り旧太田勢力は、皆無となりその家臣達の行方は如何様になつたか、明らかではない。

岩槻城は、名実共に北条氏の持となり、越谷地方の諸文書は、内山弥衛門名で、年貢の催促、請取、陣夫割催告、城番詰の夫役の割付等々数多くの文書を見る時、越谷地方の生き残つた者等の上に、之等の賦課が重くのしかかつて来た事が推察される。

武田信玄、関東に出馬す。(元龜二年一五七二) 正月、信玄は太田三楽斎父子に年頭の手送りを、参陣を乞う。信玄羽生城より出馬 木戸・広田両將を攻める。

信玄の岩槻城回復は今春との言に心動くか？

上杉謙信 (元龜二年三月) 三楽斎資正の變心を怒る。この時期謙信と三楽斎資正・佐竹氏・里見氏等反北条勢力は、武田信玄に心を寄せていた事となる。

北条氏繁 (元龜三年一五七二) 岩槻諸臣に着到狀改める。

氏繁文書 大相模不動院に岩槻城堅固を祈願せしめる。

北条氏 下野小山城を攻める。

上杉謙信 佐竹・三楽斎父子に再三書を送り味方する様をう。同九月謙信は 三楽斎に先年の不和を謝る。

太田資正父子は、小田氏治の城 小田城を攻め取る。この時江戸太田新六郎與資見える。(元龜四年十二月)

太田父子、再び常陸乙幡にて、小田天庵と戦い之を破り小田城攻略す。(天正元年四月中旬)

武田信玄 (天正元年四月十三日卒、享年五十三歳)。

上杉謙信 (天正二年二月) 沼田に着城のち前橋城に入り、關宿城中心に、謙信と北条方との争奪戦始まる。

同 四月下旬、謙信は上武國境に布陣し、北条に対す。

關宿城落る

天正二年 (一五七三) 十一月上杉謙信、北条への持城關宿城を攻め落す。

長篠合戦、(天正三年五月) 武田勝頼は、織田徳川軍と長篠に戦い、織田の鉄砲の前に甲州騎馬軍団は壊滅した。

上杉謙信、(天正六年三月) 春日山にて、上杉謙信卒。享年四十九歳。

◎謙信の死後、半義を待たず御館の乱始まり、上杉軍団は半分となつたと云はれる。

大平山城攻め、(天王六年一五七八) 北条氏、下野の皆川氏を攻め、大平山城に戦う、太田十郎氏房参陣す。初陣か十五歳。

石山本願寺落つ。(天正八年一五八〇) 門徒宗の総本山石山本願寺落城す。織田信長苦心の十一年の歲月であつた。信長天下統一の夢今一步に近づく。

佐野城攻め。(天正九年一五八二) 北条氏、佐野城攻める。岩槻衆参陣す。

武田勝頼滅亡

天正十年(一五八二) 三月十一日武田信玄死して十年、遂に勝頼、甲斐・信濃を風林火山の旗が翻つたのも一場の夢と、織田信長の前に亡んだ。

本能寺の変

天正十年(一五八二) 六月二日夜半に、明智光秀、織田信長の宿所本能寺を襲い之を殺す。石山本願寺を退治し、武田勝頼を亡ぼし、天下統一を目前にしての事件である。舞台は豊臣秀吉に廻る。

◎織田信長の書 天正十年四月八日三楽齋父子に、書を発、直参で有る事、滝川一益(管領)に協力を乞う。

◎徳川家康の書 天正十年十月十七日髭原政景に、徳川家康親書を送る。

足利義氏 (天正十年一五八二) 古河公方義氏、公方館にて没す。

栃木城攻め、天正十三年(一五八五) 北条氏、下野皆川氏を攻める。藤岡に布陣する。岩槻衆参陣す。

北条氏景、太田氏資の忘れ形見の娘と祝言を挙る。太田氏房と名乗る。二十一歳。

◎氏家文書

(天正十四年一四八六、正月十八日) 大相模不動院に対し禁制下す。

◎元龜元年、武田信玄、関東に出馬羽生城より木戸・広田を攻める時、太田三樂齋父子に親交を求め、又佐竹・里見とも通じた、三樂齋信玄の来春には岩槻城回復するであろうとの言に、心動くか。上杉謙信と疎遠となる常陸片野の城で岩槻城奪還の期をうかがう様子が推察出来る。

◎北条氏はこの間武蔵の経営に鋭意努力している。

◎岩槻城付将臣に、(元龜三年) 着到状改める。

◎氏繁文書、大相模不動院に岩槻城堅固を祈願せしめる。

◎北条氏、下野小山氏攻撃する。

◎上杉謙信 武田信玄に心を寄せる太田三樂齋・佐竹氏に再三に渡り書を送り味方する様に乞い、(元龜三年九月) 三樂齋に対し先年の不和を謝る。之に依り太田氏謙信に呼応するか。

◎太田資正父子は、小田氏治の小田城を攻める。(元龜四年五月) 同十二月資正再び常陸乙幡に、小田天庵と戦い之を破り小田城を攻略す。

◎上杉謙信、(天正二年二月) 前橋城に着陣、関宿城争奪戦始まり、四月上旬、謙信は上武国境に布陣、十一月謙信は、関宿城を攻め落す。

◎上杉謙信卒、(天正六年三月) 戦後の虎謙信卒して、三樂齋の夢は、佐竹を後盾として岩槻城奪回であつたが上杉謙信に忠誠を尽したが、遠成困難と見て、一時武田信玄にその野謀を託したが、元龜四年信玄の死そして再び、謙信に従い、関宿奪回戦で、岩槻に近付いたが、又々謙信の死により三樂齋の夢は違ひいた。

◎武田氏が亡び、織田が亡び、豊臣秀吉の時代となる。北条は、着々と下野侵略を進め、佐野・皆川氏を降す。

◎太田氏房、太田氏資の志片身の懐と祝言して、太田の名跡を継ぐ、二十一歳。翌天正十三年正月十八日付、大相模不動院に対し、禁制を下す。対豊臣秀吉との戦を決意した証である。

豊臣秀吉、小田原征伐の開始

◎天正十四年より、岩槻城の大講討始まり、人足の徵用、三宅町入迄、領内の者を書出させて、戦要要員として動員する付令を出し、曲輪、堀、塹、の修築、資材の徴発、連夫の徵課等々次々と戦用準備の命令が発せられて、戦雲急を告げる文書をも数見の事が出来る。

豊臣秀吉 關東討伐

天正十四年（一五八六） 六月十一日氏房、岩槻城大普請の人足徴用の書発す。

天正十四年（一五八六） 六月十一日岩槻中城の普請人足を徴用の書発す。

天正十五年（一五八七） 氏房、小田原城普請人足の着到を家臣に命ず。

同 氏房家臣に対し、石倉城（前橋）番衆二十名を命ず。

同 三月十九日氏房、井草百姓に対し、岩槻城普請の材木運搬を命ず。

同 八月七日氏房、領内の百姓町人に至迄、十五〜七十歳の男子戦鬪要員とす。

同 八月八日氏房、領内の百姓町人に至迄、十五〜七十歳の男子を記名して領主に差出す様命ず。

同 八月二十八日氏房、箕輪開発の田畑六貫文に対して二人の陣夫を課す。

同 十月二十八日氏房、岩槻城諸曲輪の塀を修理の為、領内百姓に人夫を課す。

同 十二月二十四日氏房、家臣に出陣の書発し。城内に妻子を集め、人質とする。

天正十六年（一五八八） 正月六日氏房、岩槻城曲輪の外構を修理の為、領内百姓に人夫を課す。

同 三月二十日氏房、岩槻城普請に付いての書発す。

同 五月五日氏房、岩槻の家臣二十二人を小田原番衆として発す。

同 四月二十七日北条氏、大田下野守に、家来が逃亡した事を叱責し二百人の手間を課す。

同 九月二十六日岩槻衆、上州名胡桃城を攻め。家臣浜野小太郎忠直戦死す。

同 十一月二十八日秀吉、三楽齋資正に、春には小田原攻めを成すと、書送る。

天正十八年（一五九〇） 氏房、家臣の着到を改める。 正月十八日 氏房、岩槻城普請にて一戸一人の人足を課す。二月十二日 三月二十日氏房、太田窪領主、逃亡、百姓に罪無し、岩槻城普請と春作に精出す様命ず。

小田原城攻め始る

同 天正十八年（一五九〇） 四月十八日小田原城外で、寿能城主潮田出羽守資忠・息左馬允資勝討死す。

同 五月三日氏房、家臣と共に、上方勢と戦う。

同 岩槻城兵、妹尾下総守以下勇戦するも落城す。 五月二十日

同 六月一日 浅野彈正長吉、岩槻家臣コオノス五人衆に帰郷を命ず。

同 七月二日 氏房、上方勢に城を出て夜討を懸ける。

同 七月三日 秀吉、氏房の陣營に、降伏を勧告す。

小田原城落城す。

太田氏資討死 (永祿十年一五六七) 北条勢、安房・里見討伐の時 上総三船城外に於て家臣五十三名と共に討死す。是に依り旧太田勢力は、皆無となりその家臣達の行方は如何様になつたか、明らかではない。

岩間氏は、名実共に北条氏の持となり、越谷地方の諸文書は、内山弥衛門名で、年貢の催促、請取、陣夫割催告、城番詰の夫役の割付等々数多くの文書を見る時、越谷地方の生き残つた者等の上に、之等の賦課が重くのしかゝつて来た事が推察される。

武田信玄、関東に出馬す。(元龜二年一五七二) 正月、信玄は太田三樂斎父子に年貢の書送り、參陣を乞う。信玄羽生凌より出馬 木戸・広田兩將を攻める。
②信玄の岩間城回復は今春との言に心動くか？

上杉謙信 (元龜二年三月) 三樂斎資正の変心を怒る。この時期謙信と三樂斎資正・佐竹氏・里見氏等反北条勢力は、武田信玄に心を寄せていた事となる。

北条氏繁 (元龜三年一五七三) 岩間藩臣に着到狀改める。

氏繁文書 大相模不動院に岩間城堅固を祈願せしめる。

北条氏 下野小山城を攻める。

上杉謙信 佐竹・三樂斎父子に再三書を送り味方する様をう、同九月謙信は、三樂斎に先年の不和を謝る。

太田資正父子は、小田氏治の城 小田城を攻め取る。この時江戸太田新六郎康資見える。(元龜四年十二月)

太田父子、再び常陸乙幡にて、小田天庵と戦い之を破り小田城攻略す。(天正元年四月中旬)

武田信玄 (天正元年四月十三日卒、享年五十三歳)。

上杉謙信、(天正二年二月) 沼田に着城のち前橋城に入り、關宿城中心に、謙信と北条方との争奪戦始まる。

同 四月下旬、謙信は上武國境に布陣し、北条に対す。

關宿城落る。

天正二年(一五七二) 十一月上杉謙信、北条氏方の持城關宿城を攻め落す。

長篠合戦、(天正三年五月) 武田勝頼は、織田徳川軍と長篠に戦い、織田の鉄砲の前に甲州騎馬軍団は壊滅した。

上杉謙信、(天正六年三月) 春日山にて、上杉謙信卒。享年四十九歳。

◎謙信の死後、半歳を待たず御館の乱始まり、上杉軍団は半分となつたと云はれる。

大平山城攻め、(天王六年一五七八) 北条氏、下野の皆川氏を攻め、大平山城に戦う、太田十郎氏房参陣す。初陣か十五歳。

石山本願寺落つ。(天正八年一五八〇) 門徒宗の総本山石山本願寺落城す。織田信長苦心の十一年の歳月であつた。信長天下統一の夢今一步に近づく。

佐野城攻め。(天正九年一五八二) 北条氏、佐野城攻める。岩槻衆参陣す。

武田勝頼滅亡

天正十年(一五八二)三月十一日武田信玄死して十年、遂に勝頼、甲斐・信濃を風林火山の旗が翻つたのも一場の夢と、織田信長の前に亡んだ。

本能寺の変

天正十年(一五八二)六月二日夜半に、明智光秀、織田信長の宿所本能寺を襲い之を殺す。石山本願寺を退治し、武田勝頼を亡ぼし、天下統一を目前にしての事件である。舞台は豊臣秀吉に廻る。

◎織田信長の書Ⅱ天正十年四月八日三楽齋父子に、書を発、直参で有る事、滝川一益(管領)に協力を乞う。

◎徳川家康の書Ⅱ天正十年十月十七日髭原政景に、徳川家康親書を送る。

足利義氏 (天正十年一五八二) 古河公方義氏、公方館にて没す。

栃木城攻め、天正十三年(一五八五) 北条氏、下野皆川氏を攻める。藤岡に布陣する。岩槻衆参陣す。

北条氏房、太田氏資の忘れ形見の娘と祝言を挙る。太田氏房と名乗る。二十一歳。

◎武田氏没す (天正十四年一四八六、正月十八日) 大相模不動院に対し禁制下す。

◎元龜元年、武田信玄、関東に出馬羽生城より木戸・広田を攻める時、太田三樂斎父子に親交を求め、又佐竹・里見とも通じた、三樂斎信玄の来春には岩槻城回復するであろうとの言に、心動くか。上杉謙信と疎遠となる常陸片野の城で岩槻城奪還の期をうかがう様が推察出来る。

◎北条氏はこの間武蔵の経営に鋭意努力している。

◎岩槻城行将臣に、(元龜三年) 着到状改める。

◎氏繁文書、大相模不動院に岩槻城堅固を祈願せしめる。

◎北条氏、下野小山氏攻撃する。

◎上杉謙信、武田信玄に心を寄せる太田三樂斎・佐竹氏に再三に渡り書を送り味方する様に乞い、(元龜三年九月) 三樂斎に対し先年の不和を謝る。之に依り太田氏謙信に呼応するか。

◎太田資正父子は、小田氏治の小田城を攻める。(元龜四年五月) 同十二月資正再び常陸乙幡に、小田天庵と戦い之を破り小田城を攻略す。

◎上杉謙信、(天正二年二月) 前橋城に着陣、関宿城争奪戦始まり、四月上旬、謙信は上武國境に布陣、十一月謙信は、関宿城を攻め落す。

◎上杉謙信卒、(天正六年三月) 越後の虎謙信卒して、三樂斎の夢は、佐竹を後盾として岩槻城奪回であつたが上杉謙信に忠誠を尽したが、達成困難と見て、一時武田信玄にその野謀を託したが、元龜四年信玄の死そして再び、謙信に従い、関宿奪回戦で、岩槻に近付いたが、又々謙信の死により三樂斎の夢は遠のいた。

◎武田氏が亡び、織田が亡び、豊臣秀吉の時代となる。北条は、着々と下野侵略を進め、佐野・皆川氏を降す。

◎太田氏房、太田氏資の志片身の娘と祝言して、太田の名跡を継ぐ、二十一歳。翌天正十三年正月十八日付、大相模不動院に対し、禁制を下す。対豊臣秀吉との戦を決意した証である。

豊臣秀吉、小田原征伐の開始

◎天正十四年より、岩槻城の大體講始まり、人足の徵用、百姓町人迄、領内の者を書出させて、戦鬪要員として動員する付令を出し、曲輪、堀、塀、の修築、資材の徵發、陣夫の戦鬪準備の命令が發せられて、戦鬪急を告げる文書を多枚見る事が出来る。

豊臣秀吉関東討伐

天正十四年（一五八六）

六月十一日氏房、岩槻城大普請の人足取用の書発す。

天正十四年（一五八六）

六月十一日岩槻中城の普請人足を徴用の書発す。

天正十五年（一五八七）

氏房、小田原城普請人足の着到を家臣に命ず。

同

氏房家臣に対し、石倉城（前橋）番衆二十名を命ず。

同

三月十九日氏房、井草百姓に対し、岩槻城普請の材木運搬を命ず。

同

八月七日氏房、領内の百姓町人に至迄、十五〜七十歳の男子戦闘要員とす。

同

八月八日氏房、領内の百姓町人に至迄、十五〜七十歳の男子を記名して領主に差出す様命ず

同

八月二十八日氏房、箕輪開発の田畑六貫文に対して二人の陣夫を課す。

同

十月二十八日氏房、岩槻城諸曲輪の塀を修理の為、領内百姓に人夫を課す。

同

十二月二十四日氏房、家臣に出陣の書発し。城内に妻子を集め、人質とする。

天正十六年（一五八八）

正月六日氏房、岩槻城曲輪の外構を修理の為、領内百姓に人夫を課す。

同

三月二十日氏房、岩槻城普請に付いての書発す。

同

五月五日氏房、岩槻の家臣二十二人を小田原番衆として発す。

天正十七年（一五八九）

四月二十七日北条氏、大田下野守に、家来が逃亡した事を叱責し二百人の手間を課す。

同

九月二十六日岩槻衆、上州名胡桃城を攻め。家臣浜野小太郎忠直戦死す。

同

十一月二十八日秀吉、三塗齋資正に、春には小田原攻めを成すと、書送る。

天正十八年（一五九〇）

氏房、家臣の着到を改める。 正月十八日

同

氏房、岩槻城普請にて一戸一人の人足を課す。二月十二日

同

三月二十日氏房、太田窪領主、逃亡、百姓に罪無し、岩槻城普請と春作に清出す様命ず。

小田原城攻め始る

天正十八年（一五九〇）

四月十八日小田原城外で、寿能城主瀧田出羽守資忠・息左馬允資勝討死す。

同

五月三日氏房、家臣と共に、上方勢と戦う。

同

岩槻城兵、妹尾下総守以下勇戦するも落城す。 五月二十日

同

六月一日 浅野弾正長吉、岩槻家臣コオノス五人衆に帰郷を命ず。

同

七月二日 氏房、上方勢に城を出て夜討を懸ける。

同

七月三日 秀吉、氏房の陣營に、降伏を勧告す。

同

七月二十日 小田原城開城す。氏房、兄氏直等と降伏、小田原より、高野山に向う。

小田原城開城す。

天文十七年より、先づ上州方面より戦鬪の小競合が始まり、氏房、家臣の着到状改め。秀吉は、三楽齋資正に春には小田原城を攻めるので、参戦する様書を送る等、緊迫した状勢にて、天正十八年が開け、春と共に小田原北条攻めが開始され、四月十八日寿能城・五月二十日岩槻城落城、七月三日秀吉は氏房の陣營に降伏を勧告す。遂に小田原城は開城となり、二十日氏房・氏直等降伏、高野山に向う。

同 八月、關東は徳川家康の所領となり、江戸城に入国す。以後の諸書に御入国の節・御入国以来とあるは、之の時期を云う。

北越谷の歴史と云うタイトルで古代より中世末期迄を、唯羅列したに過ぎないが、北越谷のみの痕跡では各時代に解明出来ないもので、その属する国・郡・庄・郷・領・村等を見る事で、その時代々々の発展状況や、慌廢の理由等を知る事が出来た事と思う。

越谷地方は、下総・武蔵の国境で氏族も別々であつたが、中世の後半より武蔵国に編入され、北条勢力下に組込まれ、やがて徳川徳制のもとに、支配されてしまつた。新勢力の変る度に、旧組織が破解され新勢力に組改され、旧支配層は滅亡し、又次の新勢力の台頭により、別の組織に再編されて行く様が、関連事件の羅列ではあるが、解明の手がかりになるはつてである。

新領主徳川家康の時代になり、国内では相当の因縁があつた事であるう、早くに新政権に受入れられた者は良いが、乗りはぐつた者の不平分子は、大阪冬陣・夏陣に参加一旗挙げ様と目論む者もあつたと伝承されているが、徳川政權の確立の前に、その支配の中に組込まれて、皆一様に百姓身分に落されている。

小田原落城後は、これ等合戦に巻き出された者達は、帰農させられ土地を失つた者達は、村外れの荒地の開田に追いやられた事であるう事がうかがえる様な、系図を持つ家を問々見る事が出来る。

まとめ

以上を以て、北越谷の歴史の内、古代・中世を終わりますが、まとめとして越谷全対の神社・仮神を時代的に列べてその時代の関係有るものを折込して、解説してまゝと致します。

浅間神社

以上越谷地方の歴史に付いて記して来ましたが、北越谷の地は非常に古い時代より開けていた地域であつた事が証明されたわけであるが、越谷市内にある浅間神社の分布は次の如くである

浅間神社 大沢二丁目(大房の境)
大竹神社 大竹神社合社

浅間神社 越ヶ谷中町
護郷神社 増林神社合社

香取神社

大房の地には香取社の祭祠はないが、同じ大袋地内の村々には皆一様に祭祠してあるので、香取神社時代には即ち、開発され人々の生活が有り、村落が形成されていた事が証明されるのである。そして、元荒川の東側の村々に香取神社の祭祠が成されている事は、下総国であつたと云う証拠である。越谷地域の香取神社の分布を記すと次の如くである。

増林 香取神社
船戸 香取神社
大吉 香取神社
北川崎 川崎神社合詞
大松 香取神社一社合社
向畑 香取神社
東小林(東越谷) 香取神社
上間久里 香取神社
下間久里 香取神社

大沢 香取神社(鷲後より勧請とあり鷲後に元宮有り)
恩間 香取神社
大林 香取神社
大竹 大竹神社浅間神社と合社
大道 大道神社合社
三ノ宮 香取神社
大泊 香取神社
平方 香取神社

久伊豆神社

元荒川の西側、即ち騎西郡と云はれた地域には、皆一様に久伊豆神社が祭られている。

祭神は大己貴命で神社名は異なるが、武蔵国の神である。之等の神社の有る村落は、この神社の時代即ち集落が形成されていた証であり、元荒川が、その当時は下総国と武蔵国との国境をなす大河であつた証拠である。

袋山・花田地区は昔古は川の西側であつたが、河川の改修により今は東側にあるが、武蔵国であつた証拠に久伊豆神社を祀られている。この地域の久伊豆神社を記すと次の如くである。

| | | | |
|--------|-------|----|-------|
| 越ヶ谷宮前町 | 久伊豆神社 | 袋山 | 久伊豆神社 |
| 伊原 | 久伊豆神社 | 蒲生 | 久伊豆神社 |
| 東方 | 久伊豆神社 | | |
| 砂原 | 久伊豆神社 | | |
| 野島 | 久伊豆神社 | | |
| 小曾川 | 久伊豆神社 | | |

以上越谷市内の浅間・香取・久伊豆神社の分布を記したが、元荒川を狭んで西側に久伊豆神社・東側に香取神社の祭詞されている事から、香取・久伊豆神社の時代即ち下総・武蔵国の国別が確定していた事を示すものである。北方結城市迄祭詞され・騎西郡には、騎西町迄久伊豆神社の祭詞を見る事が出来る。又浅間神社の時代には、国別以前の時代の為か、それに関係なく分布を見る事が出来る。

地質から見た村落の成立

航空写真で見た越谷地方は、河川が必要以上に湾曲している。何故なのだろうか、越谷地方の地下には断層が走っている事が確認されているが、この航空写真で見ると、その断層の為に隆起した所から上流は、川の流れが止り、河川の水が溢れ、池沼が出来、河川の流れが緩慢となり湾曲する。そこから下流は海に向つて一直線に流れている様を見る事が出来る。関東地方をもつと広範囲に見ると、何箇所も断層の跡を見る事が出来又一度に出来たのではなく、それぞれに時代年代の異いがある。この様な現象の中の越谷地方の地質を考察すると、河川が湾曲した所が、洪水の度に大量の土砂が押流されて滞積した所に、冬期水が枯れ西風が吹き砂が飛ばされて砂丘が出来て、河川の自然堤防が発達する。この自然堤防の微高地に人間が一旦始めに（越谷地方）住み付き集落を作つて来た。後背地に耕作適地が広い程人口が多く大きな集落が出来たはづである。

水が溢れ池沼や湿地となつた所には、粒子の細かい粘土質の土壌が滞積し、之れが後年水田の水の漏水を止める役目をして水田適地として発展するのである。

河川堤防の微高地には、峽長い形の古い部落が形成されていて、之等を良く観察する事により、自然の内に村落が成立して来た過程が理解する事が出来る。

越谷地域で、古い時代のものとして、縄文晩期と云はれる丸木舟の発見が伝えられている。古墳に関する記述は、埼玉県史に大相模・柿ノ木・八条にその存在が記載されている。

三田方遺跡と名付けられて、古代住居跡が発見され越谷地域にも古代より人が住んでいたと云う、考古学的発見がなされた事は、喜ばしい事である。

条里制遺名と云はれる地名が埼玉市内に残っている。その全ほうを解明されてはいないが、大化改新(六四五)後の行政の痕跡を見る事が出来る。

別府と云う地名が、残っている。今日迄に何等の調査もなされていないが、之の地名は明らかに国府に対する支所にあつた所と理解する事が出来る。当時は交通機関として、舟が一番であつた事であろう、熊谷市にも別府の地名を見る事が出来、利根川の本流が流れていた当時とすれば、元荒川との合流地点である別府の地は、政治・経済・交通の要衝であつた事がうかがえる地点である。

大房の薬師堂の開期は大同一二年(八〇七)と伝えられ、市内の寺院で開基年記の解るものでは、古い方である。薬師寺は、天武天皇の御代(六六二―六八六)の開基を伝えるものが多いが、その後天平宝字五年(七六一)官寺として全国の国府の周辺に整備されたとあり、薬師寺の普及年代を知る事が出来る。

大房の地には

- | | | | |
|-----|--------|-------|------------|
| 浄光寺 | 開基年記未詳 | 稲荷神社 | 村の鎮守 |
| 千手院 | 開基年記未詳 | 地藏堂 | 千手院の持 以下同じ |
| 東光寺 | 開基年記未詳 | 〇麻利支天 | 〇八幡社 |
| | | 〇弁天社 | |

二十一仏飯碑 大房浄光寺道路端 永祿元年(一五五八)十二月吉日

天慶の乱、平将門が新皇と称して岩井の地に新宮を築造した。京都の中央では、平貞盛を将門討伐將軍に、藤原秀郷を追討吏に任命して将門激伐軍を発した。岩井に於て将門を討取り之の乱が終つたが、之の時將門に味方した武藏竹芝(代々武藏國造の家柄)の支配地は総て、平良文の子忠頼の押領する所となり、その子忠常武藏押領使に任命され、一族が武藏の各地に入部した。騎西郡には野与四郎胤宗が野与に入部し、野与を称し、その一族が領内各地に播種して繁榮した。この一族を野与党と云い、武藏七党の一に数えられている。

天文十七年より、先づ上州方面より畿關の小競合が始まり、氏房、家臣の着到状改め。秀吉は、三樂齋資正に春には小田原城を攻めるので、参戦する様書を送る等、緊迫した状勢にて、天正十八年が明け、春と共に小田原北条攻めが開始され、四月十八日寿能城・五月二十日岩槻城落城、七月三日秀吉は氏房の陣營に降伏を勧告す。遂に小田原城は開城となり、二十日氏房・氏直等降伏、高野山に向う。

同 八月、關東は徳川家康の所領となり、江戸城に入国す。以後の諸書に御入国の節・御入国以來とあるは、之の時期を云う。

北越谷の歴史と云うタイトルで古代より中世末期迄を、唯羅列したに過ぎないが、北越谷のみの痕跡では各時代に別解明出来ないで、その属する國・郡・庄・郷・領・村等を見る事で、その時代々々の發展状況や、慌廢の理由等を知る事が出来た事と思ふ。

越谷地方は、下総・武蔵の國境で氏族も別々であつたが、中世の後半より武蔵國に編入され、北条勢力下に組込まれ、やがて徳川幕制のもとに、支配されてしまつた。新勢力の変る度に、旧組織が破解され新勢力に組改され、旧支配層は滅亡し、又次の新勢力の台頭により、別の組織に再編されて行く様が、關連事件の羅列ではあるが、解明の手がかりになるはずである。

新領主徳川家康の時代になり、国内では相当の因乱があつた事であるが、早くに新政権に受入れられた者は良いが、乗りはぐつた者の不平分子は、大坂冬陣・夏陣に参加一旗挙げ様と目論む者もあつたと伝承されているが、徳川政權の確立の前に、その支配の中に運込まれて、皆一様に百姓身分に落されている。

小田原落城後は、これ等合戦に駆り出された者達は、帰農させられ土地を失つた者達は、村外れの荒地の開田に追いやられた事である事がうかがえる様な、系図を持つ家々を見る事が出来る。

まとめ

以上を以て、北越谷の歴史の内、古代・中世を終ります。まとめとして越谷等の神社・仮禊を時代的に列べてその時代の関係するものを折込んで、解説の「まとめ」を致しました。

浅間神社

以上越谷地方の歴史に付いて記して来ましたが、北越谷の地は非常に古い時代より開けていた地域であつた事が証明されたわけであるが、越谷市内にある浅間神社の分布は次の如くである

浅間神社 大穴二丁目(大房の境)
大竹神社 大百神社合社

浅間神社 越ヶ谷中町
護国神社 増林神社合社

香取神社

大房の地には香取社の祭祠はないが、同じ大袋地内の村々には皆一様に祭祠してあるので、香取神社時代には即ち、開発され人々の生活が有り、村落が形成されていた事が証明されるのである。そして、元荒川の東側の村々に香取神社の祭祠が成されている事は、下総国であつたと云う証拠である。越谷地域の香取神社の分布を記すと次の如くである。

増林 香取神社
船戸 香取神社
大吉 香取神社
北川崎 川崎神社合詞
大松 香取神社一社合社
向畑 香取神社
東小林(東越谷) 香取神社
上間久里 香取神社
下間久里 香取神社

大沢 香取神社(鷲後より勧請とあり鷲後に元宮有り)
恩間 香取神社
大林 香取神社
大竹 大竹神社浅間神社と合社
大道 大道神社合社
三ノ宮 香取神社
大泊 香取神社
平方 香取神社

久伊豆神社

元荒川の西側、即ち騎西郡と云はれた地域には、皆一様に久伊豆神社が祭られている。

祭神は大己貴命で神社名は異なるが、武蔵国の神である。之等の神社の有る村落は、この神社の時代即ち集落が形成されていた証であり、元荒川が、その当時は下総国と武蔵国との国境をなす大河であつた証拠である。

袋山・花田地区は昔古は川の西側であつたが、河川の改修により今は東側にあるが、武蔵国であつた証拠に久伊豆神社が祀られている。この地域の久伊豆神社を記すと次の如くである。

| | | | |
|--------|-------|----|-------|
| 越ヶ谷宮前町 | 久伊豆神社 | 袋山 | 久伊豆神社 |
| 伊原 | 久伊豆神社 | 蒲生 | 久伊豆神社 |
| 東方 | 久伊豆神社 | | |
| 砂原 | 久伊豆神社 | | |
| 野島 | 久伊豆神社 | | |
| 小曾川 | 久伊豆神社 | | |

以上越谷市内の浅間・香取・久伊豆神社の分佈を記したが、元荒川を狭んで西側に久伊豆神社・東側に香取神社の祭詞されている事から、香取・久伊豆神社の時代即ち下総・武蔵国の国別が確定していた事を示すものである。北方結城市迄祭詞され、騎西郡には、騎西町迄久伊豆神社の祭詞を見る事が出来る。又浅間神社の時代には、国別以前の時代の為か、それに關係なく分佈を見る事が出来る。

地質から見た村落の成立

航空写真で見た越谷地方は、河川が必要以上に湾曲している。何故なのだろうか、越谷地方の地下には断層が走っている事が確認されているが、この航空写真で見ると、その断層の為に隆起した所から上流は、川の流れが止り、河川の水が溢れ、池沼が出来、河川の流れが緩慢となり湾曲する。そこから下流は海に向つて一直線に流れている様を見る事が出来る。関東地方をもつと広範囲に見ると、何個所も断層の跡を見る事が出来又一度に出来たのではなく、それぞれに時代年代の異いがある。この様な現象の中の越谷地方の地質を考察すると、河川が湾曲した所が、洪水の度に大量の土砂が押流されて滞積した所に、冬期水が枯れ西風が吹き砂が飛ばされて砂丘が出来て、河川の自然堤防が発達する。この自然堤防の微高地に人間が一番始めに（越谷地方）住み付き集落を作つて来た。後背地に耕作適地が広い程人口が多く大きな集落が出来たはずである。

水が溢れ池沼や湿地となつた所には、粒子の細かい粘土質の土壌が滞積し、之れが後年水田の水の漏水を止める役目をして水田適地として発達するのである。

河川堤防の微高地には、峽長い形の古い部落が形成されていて、之等を良く観察する事により、自然の内に村落が成立して来た過程が理解する事が出来る。

越谷地域で、古い時代のものとして、縄文晩期と云はれる丸木舟の発見が伝えられている。古墳に関する記述は、埼玉県史に大相模・柿ノ木・八条にその存在が記載されている。

三田方遺跡と名付けられて、古代住居跡が発見され越谷地域にも古代より人が住んでいたと云う、考古学的発見がなされた事は、喜ばしい事である。

条里制遺名と云はれる、地名が越谷市内に残っている。その全ほうを解明されてはいないが、大化改新(六四五)後の行政の痕跡を見る事が出来る。

別府と云う地名が、残っている。今日迄に何等の調査もなされていないが、之の地名は明らかに国府に対する支所にあつた所と理解する事が出来る。当時は交通機関として、舟が一番であつた事であろう、熊谷市にも別府の地名を見る事が出来、利根川の本流が流れていた当時とすれば、元荒川との合流地点である別府の地は、政治・経済・交通の要衝であつた事がうかがえる地点である。

大房の薬師堂の開期は大同二年(八〇七)と伝えられ、市内の寺院で開基年記の解るものでは、古い方である。薬師寺は、天武天皇の御代(六六二―六八六)の開基を伝えるものが多いが、その後天平宝宇五年(七六一)官寺として全国の国府の周辺に整備されたとあり、薬師寺の普及年代を知る事が出来る。

大房の地には

浄光寺 開基年記未詳

稲荷神社

村の鎮守

千手院

開基年記未詳

麁寺

地藏堂

千手院の持 以下同じ

東光寺 開基年記未詳

麁寺

○麻利支天

○八幡社

○弁天社

二十一仏板碑

大房浄光寺道路端

永祿元年(一五五八)十二月吉日

天慶の乱、平将門が新皇と称して岩井の地に新宮を築造した。京都の中央では、平貞盛を将門討伐將軍に、藤原秀郷を追討吏に任命して将門懲伐軍を發した。岩井に於て将門を討取り之の乱が終つたが、之の時將門に味方した武蔵竹芝(代々武蔵国造の家柄)の支配地は総て、平良文の子忠頼の押領する所となり、その子忠常武蔵押領使に任命され、一族が武蔵の各地に入部した。騎西郡には野与四郎胤宗が野与に入部し、野与を称し、その一族が領内各地に播種して繁榮した。この一族を野与党と云い、武蔵七党の一に数えられている。

藤原秀郷は、乱の後北葛飾郡及び新方庄を受領してその後永く威を奮った。下河辺・大川戸氏等々の党である。之れ等枝族として、名字の上に藤の字の付くものに、藤田・藤井・藤代・藤城・藤谷等々又名字の下に藤の字の付くものに、佐藤・近藤・遠藤・武藤・工藤・伊藤等々そして藤原領内の地名を冠して名字としたものに大川戸風早・黒田等々の藤原氏族を示す名字の人々を多く見る事が出来る。

古志賀谷氏、越谷の地に播擲したが、今は建長元年記の板碑の他数枚の板碑を残すのみ、その存在すら認められなかつた古志賀谷氏が鎌倉時代に居た。「昔々越ヶ谷には越ヶ谷太郎と云う人が居た」と云う話のみを頼りに捜し求めて、やうやお房総ソオ書の中に千葉大系図と云う系図中に古志賀谷氏の名を発見した。今越谷市市史通史1に記されている古志賀谷氏がそれである。

千葉宗家からの分脈で、野与に住したにより、野与四郎胤宗を称し、枝族には騎西郡北方に道智・多名・多賀谷・笠原・蒼間・高柳鬼窪・等がある、野与庄司家常宗(恒宗)は奥州の乱に出陣討死した為、千葉総家より千葉大介常長の子十郎行長号龍大夫が野与庄司家を継ぎ大蔵の地に拠した。又の号を大蔵大夫とも云う。龍大夫行長の分脈は、総家が箕勾に本拠を構えて箕勾総領家を称し、その枝族には、大蔵・南鬼窪・黒浜・江賀崎・佐那賀谷・白岡・金重・渋江・柏崎・加倉(神倉)須久毛・横根・村国・小曾川・野島・古志賀谷・大相模・八条等々の氏族が千葉大系図並びに野与党系図(群書類統)に見える。

野与党の名は、結城の合戦等にも攻囲軍の側に見える。嘉吉元年結城城落ちた翌年、越谷本町に市神社が建立され嘉吉二年(一四四二)の棟札が見えるので、民政が安定したので、市が盛大になつた事を示している。

新方庄の成立、新方の庄とは、吉川町との境古利根川と元荒川との合流点より二河川の間で上流は、古隅田川(会の川)迄(春日部小淵より岩槻迄)の三角地点にて、古くは下総国その後時代的には明確ではないが、小田原北条氏の時代?武蔵国と云う様になり、江戸時代には武蔵国騎西郡となり、明治以後は、埼玉県南埼玉郡となつている。

開発の時期は、始め北条政子の親領であつた、(三ノ宮一乗院は政子の開基を伝える)死後金沢氏のものとなるが、政子の兄義時の名で、大田庄下方の開発を命じているので、この時期が新方の庄の出来た時期と思はれる

北条義時
政子
北条泰時
金沢実泰
一実時
一頭時
一貞頭
一貞将
一称名寺領
寄進

金沢貞将の代に新田義貞鎌倉を攻め、鎌倉幕府滅亡し北条氏も亡んだが、金沢貞将も迎撃戦の府中分倍河原の合戦の時戦死、この前年元弘二年(正慶元年)(一二三三)貞将の全所領を称名寺に寄進している。

新方庄は之に依、称名寺領となつたが、現在春日部市備後に同名の称名寺が有る。

新方庄は、之の様に開発されたとは言え、利根川の本流が流れていた言わば、大きな中洲みたいな地であるから洪水の度に冠水は免れない土地であつた事が、検見帳で見る事が出来る。

南北朝時代に於ける、越谷市内に建立された板碑

| | | | | |
|-------------|----------|-------------|-----|---------|
| 建長元年 (一一四九) | 越谷御殿道路端 | 嘉暦三年 (一一三八) | 三月 | 大竹東養院 |
| 正和元年 (一一三二) | 大竹東養寺 | 嘉暦三年 (一一三八) | 十一月 | 西方金子染蔵氏 |
| 文保元年 (一一三七) | 恩間渡辺氏稲荷社 | 元徳三年 (一一三一) | 二月 | 東小林東福寺 |
| 元亨三年 (一一三三) | 東小林一―二番地 | 元徳三年 (一一三一) | 二月 | 東小林東福寺 |
| 嘉暦元年 (一一三六) | 越谷久伊豆神社 | 正慶元年 (一一三三) | 十二月 | 東小林東福寺 |
| 嘉暦二年 (一一三七) | 大松清浄院 | 元弘三年 (一一三三) | 十一月 | 西方金子染蔵氏 |

南北朝時代

春日部氏が、新田義貞の挙兵に先づ応じて之に従つてゐるが、建武の中興成り、東の間足利尊氏の反乱にて、一時西国に追落したが、尊氏は西国の兵を督して攻め上り、湊川の合戦・京都鶯森の戦と官軍敗れ、新田義貞北国に逃れたが、金沢にて討たれた。この時春日部氏も亡んだものと思はれる。大平記に最後迄行を共にした供の者の中に春日部氏の名が見える。この時期春日部氏の所領内と思はれる地内に、南朝年号記載の板碑を見る事が出来る。

新田義興は、観応三年 (一一五二) 北武蔵にて挙兵、児玉・丹党や北武蔵の武士団を催して蜂起し、南朝方一時は鎌倉を占領したが、甲斐の武田が足利方に参じた為に敗れて越後・信濃に敗走した。その翌年文和二年 (一一三五) 越谷二丁目八幡神社の御神体として板碑有り。古志賀谷氏の掘館跡と思われる所である。尚古志賀谷氏の同族の拠点大相模東方中村千枝氏墓地にも文和三年 (一一五四) 六字名号の板碑を見る事が出来る。

南北朝期の越谷市内の板碑

| | | |
|-------------|-----|-----------|
| 正慶元年 (一一三三) | 十二月 | 東小林東福寺 |
| 元弘三年 (一一三三) | 十一月 | 西方金子染蔵氏 |
| 貞和三年 (一一三七) | 十一月 | 越谷御殿道路端 |
| 観応元年 (一一五〇) | 十二月 | 大松清浄院 |
| 文和二年 (一一三五) | 正月 | 越谷二丁目八幡神社 |
| 文和三年 (一一五四) | | 東方中村千枝氏墓地 |

| | | | | | |
|-------------|-----|-----------|-------------|----|--------|
| 延文六年 (一三六一) | 二月 | 大泊安閑寺 | 貞治〇年 (一三六〇) | 二月 | 大道土手端 |
| 延文六年 | 二月 | 西方大聖寺 | 応安元年 (一三六八) | 二月 | 東小林東福寺 |
| 延文六年 | 二月 | 見田方夫倉氏 | 応安二年 (一三六九) | 九月 | 大泊高崎司氏 |
| 延文六年 | 二月 | 西方深井氏 | 応安七年 (一三七四) | 八月 | 大相模小学校 |
| 貞治二年 (一三六三) | 二月 | 西方野口茂太郎氏 | 永和四年 (一三七八) | 八月 | 三ノ宮一乘院 |
| 貞治四年 (一三六五) | 二月 | 大道土手 | 康曆二年 (一三八〇) | 五月 | 砂原海原氏 |
| 貞治五年 (一三六六) | 十二月 | 大松清浄院 | 永徳二年 (一三八二) | 五月 | 西方大聖寺 |
| 貞治六年 (一三六七) | 六月 | 大道土手 七字題目 | 永徳四年 (一三八四) | 五月 | 西方大聖寺 |
| 貞治六年 | 十二月 | 東方中村千枝氏墓地 | 嘉慶二年 (一三八八) | 七月 | 大松清浄院 |

室町時代に入ると

明応三年(一三九一)南朝方、力儘きた形で南北合一が成立して、応永年間に入る。応永は三十四年間続くが、この間京都將軍家と鎌倉公方家、そしてそれ等の家臣達の間にも葛藤が絶えず、次の戦国時代、乱世への下地が育つて行つたのである。

禅秀の乱、応永二十三年(一四一五)京都側の禅秀が公方持氏に事を構え、持氏の為に亡ぼされ乱が終る。永享の乱、永享十一年(一四三九)には公方持氏父子が自刃して永享の乱終る。

結城の合戦、永享十三年(一四四一)持氏の遺児を擁して挙兵した結城氏朝等討死して落城、春王・安王・永寿王等遺児は捕えられて、結城の合戦終る。

◎大松清浄院由緒著聞書参照。

◎越谷本町三丁目市神社の棟札に嘉吉一年(一四四二)の記載有り。平静の世となり民心が安定して交易が盛んとなつた証述である。

室町期の越谷市内の板碑

| | | | | | |
|----------------|----|-----------|-------------|----|-----------|
| 応永 九年 (一四〇二) | 九月 | 西方田向墓地 | 嘉吉二年 (一四四二) | 六月 | 別府金剛院 |
| 応永 二十年 (一四一三) | 九月 | 東方中村千枝氏墓地 | 嘉吉四年 (一四四四) | 二月 | 大松長野本家至勢様 |
| 応永 二十九年 (一四二二) | 正月 | 東方中村千枝氏墓地 | 文安四年 (一四四七) | 四月 | 西方大聖寺 |

宝徳元年（一四四九）七月 大松清浄院
宝徳二年（一四五〇）二月 大松清浄院
心永三十三年（一四二六）六月一日越ヶ谷中町浅間神社所蔵「懸仏」に記年有り。 宝徳二年（一四五〇）十二月 大松清浄院

戦国時代

永享の乱（一四三九）以来主なき鎌倉に、（結城の合戦で捕えられたが、辛くも一命を預けられ、美濃の土岐氏のもとで長じた）永寿王丸を鎌倉の主として迎え度いと、上杉管領家が將軍義政に願ひ出た。（義教の次に將軍職を義政が嗣いだ時期の為幸運であつた）永寿王丸は許されて、鎌倉に帰り元服して成氏と改め、鎌倉公方となる。文安六年（一四四九）の事である。

成氏は、父持氏の為に忠死した家臣の子孫に領地を与え、身辺の強化を計つた。享徳三年（一四五四）成氏は管領憲忠との間に反目が続いていたが、山内の家臣長尾景仲と扇谷の家臣太田資清は協力して成氏の御殿を襲う等有り、宝徳二年（一四五〇）將軍義政の口添で和したが、長尾景仲は、上野中心に密かに一族を糾合して成氏襲撃を企てた。享徳三年（一四五四）成氏は、急に管領憲忠を襲ひ之を殺した。

享徳四年（一四五五）正月分倍河原にて激戦、上杉憲顕・扇谷顕房等討死して大敗す。上杉方は將軍に援を求めると、同六月十六日將軍義政の命を受けた感河の今川が大挙して鎌倉を攻めた。成氏は鎌倉を捨て、古河に逃れ之れに拠したので、以後古河公方を称した。

公方成氏か古河に拠す事により、関東は麻の如く乱れ戦乱止む所を知らずと鎌倉草紙に慨かせている。世は正に戦国^の世となつたのである。これより古河公方と上杉管領方との永い対立の時代が続く事になる。

戦国時代 (1)

◎康正

康正元年（一四五五）十一月十三日、原左衛門朗珍・同左京亮朗頭、武州東方にて討死す。本土寺過去帳

康正元年十二月、成氏、武田・里見・梁田の兵を以て騎西城を攻め落す。翌二年正月、成氏は、梁田出羽守の兵を以て、市川の城を攻め落す。千葉実胤は武州石浜城、同自胤は同国の赤塚城に落ち、上総・下総の兵の大半は成氏に降る。之の機に乗じ成氏は、梁田をして、武州に打て出で、足立郡の大半を押領す。

この時期、一度古河に逃れた成氏は、巻返して、足立郡迄勢力を拡張した。吉川町戸張家系図には、梁田氏の家臣として吉川に所領を持ち、働いている事が記されている。

康正二年正月、成氏は足立郡の大半を押領して、二月慈宮神社に対し足立郡・騎西郡の段錢を以て、当社の造営を寄進すると願文を発し、疋島和上杉性順、深谷城を取立てたので、之を攻めるべく岡部原に成氏は攻め勝利するも将島山右京亮深手を負い死亡したので引揚る。上杉方は、深谷城を性順に、河越城を上杉持朝に、家老太田資清に岩槻城を、子資長に江戸城を修築させた。

康正三年四月、江戸・河越・岩槻の諸城の築造終り、同四月、將軍家は渋川佐衛門佐義鏡を武蔵国司として蕨城に下向させ、上武の諸將に下知して、成氏を討取り上杉を管領となし関東を治むべしと、教書を下す。同九月二十八日より長祿元年と改元す。同長祿元年十二月、將軍家弟の左馬頭政智、還俗して伊豆堀越に下向し、堀越公方と称して、成氏討伐態勢が出来上る。

◎長祿二年八月、記録の鰐口、慈宮神社に所蔵。

康正三年（一四五七）（長祿元年）春より、岩槻より出兵して、古河城攻めが始まる。又この年五十子で（本庄市）も大激戦が戦われている。

長祿三年十月四日、上杉兵部少輔房頭は、大田庄に乱入、久米原須賀にて成氏方一色氏と合戦、大田庄小野袋に上杉教房討死、上杉勢引揚る。

寛正二年九月、成氏と上杉方と越谷野に於て戦い、成氏敗戦す。

寛正二年十月十六日、戦に岩槻等、成氏の前衝地点の高野浅間台城を急襲す、城将一色氏防戦して之を追払う。

◎越谷市神明町二丁目、元荒川の川洲より発見、三十数枚一ヶ所より出土。記銘の判明する板碑。

| | | | | | |
|-------------|--------|------|--------------|--------|-------|
| 康正三年 (一四五七) | 四月 九日 | 妙真禪尼 | 文明七年 (一四七五) | | 道光禪門 |
| 康正三年 () | 七月三日 | 道金禪門 | 文明九年 (一四七七) | 七月十八日 | 道光禪門 |
| 寛正二年 (一四六一) | 一月二十四日 | 妙心禪尼 | 文明九年 () | | 妙慶禪尼 |
| 寛正三年 (一四六二) | 九月五日 | 妙□禪尼 | 文明十年 (一四七八) | | 道妙禪門 |
| 寛正七年 (一四六六) | | 妙仙禪尼 | 文明十八年 (一四八六) | 二月 吉日 | 妙心禪尼逆 |
| 応仁元年 (一四六七) | 五月 八日 | 妙仙禪尼 | 文明十九年 (一四八七) | 十月二十二日 | 妙心禪尼 |
| 応仁三年 (一四六九) | | 妙殿禪尼 | 文明十九年 (一四八七) | | 迎妙禪門 |
| 文明三年 (一四七一) | 九月十二日 | 妙觀禪尼 | 文明□□□□ | (一四□□) | 性祐禪門 |
| 文明七年 (一四七五) | 八日 | □□禪尼 | | | |

古志賀谷氏の事跡に付いては、何一つ伝承すら残っていない。結城市称名寺(浄土真宗)に越ヶ谷氏を称する墓石を発見したにすぎない。古志賀谷氏の滅亡は知る由もないが、野与党一族として、鎌倉時代、南北朝期、室町時代と、味方した方が生き残り幸運とも云える党であつたが、古河公方と管領上杉との確執による争の渦中に巻込まれ、両勢力の接点に置かれて、他の野与党一族の名が消える頃、古志賀谷氏も消滅したのであろう。

古志賀谷氏、古志賀谷氏の事跡に付いては、何一つ伝承すら残っていない。中世の痕跡である板碑を見るのみであるが、越ヶ谷氏に關係する地点での板碑の内、一番沢山まともまつて発見されたのが、神明町川洲からのものである。古志賀谷氏の動向は野与党の運命と同一と考えて差任えないと思える。野与党は、本家の千葉氏と行を共にして鎌倉・南北朝・室町期を過して幸運とも云える程、味方した方が生き残り、その名が消えずに残つて来たが、古河公方と管領上杉との確執による争の渦に巻込まれ、地理的に両勢力の接点に置かれ、古河公方方の防衛線の外に置かれてしまつた為、滅亡してしまつたのではないかと思はれる。野与党一族の名前がこの時期を境に歴史上から消えている事から推定する事が出来、古志賀谷氏も、勿論論外ではないと考えられる。

古志賀谷氏の滅亡に付いて、以上の如き推測から、關係の深い事件と思われるものに、寛正二年、越谷野に於て合戦し成氏方の敗戦を伝えた、記事が、一番該当するものである。古志賀谷氏の滅亡に係わるものと思えるものは以上の如くて、それを知るものは、上述の板碑のみが知つてゐるのみである。

◎文正元年（一四六六）千葉夢の原豊前入道光胤、吉川野にて討死、岩槻勢と戦う？本土寺過去帳

◎応仁三年（一四六九）六月銘記十三仏板碑、下河辺庄下方鏡子口に建つ。

◎文明二年（一四七〇）越谷三藏寺開基、大旦那大田下野守。

◎越谷地方は、完全に旧勢力が駆逐され、太田氏の勢力下に属した事を意味する。古志賀谷氏滅して九年目に当る？。この翌年文明三年より、上杉勢攻勢に出て、高野城落し古河城に成氏を攻める。成氏は千葉孝胤を頼り、上総に逃れる。上杉氏、五十子より出兵、成氏方殘党を次々と降す。太田図書資忠、下野佐野城を降す。この様に古河公方成氏、守勢に廻り後退の時期で、岩槻勢力の充実の時期に天藏寺が開基された事になる。

◎文明三年 十一月 記銘、十三仏逆修板碑、新方庄増林に建つ。

◎文明四年（一四七二）成氏、家臣等の努力にて古河城に復帰す。

◎文明五年（一四七三）民部阿（高城氏）吉川にて討死、本土寺過去帳

◎文明五年十二月九日、多門勢の弟左京阿（高城氏）吉川にて討死、本土寺過去帳

◎文明五年五十子で成氏と上杉とで激戦があり、弱谷上杉政実討死す。成氏方勢力挽回している。

長尾景春、山内家の石壁、長尾景春の死後、預定は昌賢の弟忠景を家老職にした事に不満を持、文明六年、五十子在陣中に、主家に叛旗を翻えようと、長尾景春は形勢に盾を打ち、戦備を整える景春に、太田道灌に説得されるも聞かず、文明八年道灌、袋河に出張の留守中に主家のいる五十子の連を襲う。預定は五十子を捨て、上

野平井城へ退く。

◎豊島氏は、道灌の持城江戸と河越の間に居して為、景春は豊島氏を語らい、豊島氏呼応す。文明九年四月十八日、道灌は、豊島泰経を討取り、石神井城を落して豊島泰明自刃、豊島氏滅亡す。同七月には景春は成氏と語らい、成氏の渠を受ける。顕定再び上野平井城へ退く、上州滝田郡にて合戦有り。同十年正月、成氏の臣梁田の仲介にて、上杉顕定と長尾景春は和解する。然し乍ら、景春はその後も各所に兵を動かし、遂に文明十二年、秩父日野城に景春を攻め、降伏させた。成氏と和議し景春を降して、戦乱に明暮れた道灌に、ようよう平穏な日々が来た。

太田道灌殺害される

道灌の主家扇谷定政と手により、相州糟谷の館にて謀殺された。山内顕定の隠謀とも云はれるが、扇谷定政の暗愚のそしりは免かれない。道灌の死後、関東の緊張が再び始まり、新たな組合せによる勢力分野のもとに険悪なる空気が流れ始まるのである。

◎この時期の越谷市内の板碑、(神明下元荒川川洲より出土の板碑を除く)

| | | | | | |
|-------------|-----|-------------|----------------|----|--------|
| 康正三年 (二四五七) | 七月 | 西方鈴木春吉氏 | 文明十年 (二四七八) | 三月 | 別府金剛院 |
| 寛正四年 (二四六三) | 正月 | 東方中村千枝氏墓地 | 文明十年 (〃) | 八月 | 東小林会田氏 |
| 寛正六年 (二四六五) | 九月 | 越谷御殿道路端 | 文明十年 (〃) | | 四条妙音院 |
| 応仁元年 (二四六七) | 四月 | 四丁野迎撰院 | 文明十二年 (二四八〇) | 正月 | 南百豊田氏 |
| 応仁二年 (二四六八) | | 西方秋谷氏 | 文明十三年 (二四八一) | 正月 | 西方石垣氏 |
| 応仁三年 (二四六九) | 十月 | 西方大聖寺 | 文明十三年 (〃) | 三月 | 袋山釈迦堂 |
| 文明三年 (二四七二) | 十一月 | 増林勝林寺 十三仏 | 文明十五年 (二四八三) | | 西方大聖寺 |
| 文明五年 (二四七三) | 十月 | 大松長野氏至勢様十三仏 | 文明十七年 (二四八五) | 三月 | 四丁野迎撰院 |
| 文明六年 (二四七四) | 五月 | 大松長野氏 | 文明十八年 (二四八六) | 三月 | 東小林東福寺 |
| 文明六年 (〃) | 十月 | 東方東福寺 | 文明 [] 年 (二四) | 四月 | 西方大聖寺 |
| 文明六年 (〃) | | 三田方関根淳氏 | | | |

道灌の死後、山内上杉と扇谷上杉との反目が始まり、山内上杉に道灌の息資康が、扇谷に長尾景春入道伊玄が味方し、何時果てるとも知れぬ血みどろの戦が続き、扇谷定政は公方政氏を語らい山内顕定を攻める。方す。両上杉の何時果てるとも知れぬ血みどろの戦が続き、扇谷定正は公方成氏と語らい、顕定を圧迫して延徳三年三度び高見原に戦い顕定を敗る。

◎明応二年八月、記銘逆修交名、十三仏板碑 下河辺庄下方番匠免に建つ。

◎明応四年八月十日、ヤトミ瑞虎位・同生位、東方にて討死。本土寺過去帳

◎明応三年十月十五日扇谷上杉修理大夫定正卒す。享年五十一歳。

◎明応六年九月十日、古河公方足利左兵衛督成氏没す。享年六十四歳。

北条早雲の台頭

伊勢新九郎長氏の台頭

文明八年 駿河今川家の客將伊勢新九郎は、今川家の内紛を利用して、興国城主となる。

延徳三年 (一四九一) 伊豆堀越公方茶々丸を襲い之を殺して、伊豆一國を手中に収める。

明応三年 (一四九四) 九月扇谷定正は、先に小田原城主大森氏頼卒し、之の度は、三浦時高を三浦家善父子との内紛で時高を失い、態勢挽回の為に駿河の伊勢新九郎長氏に応援を求め、その力を借りて、山内顕定伏滅の為、高見原に戦つたが、陣中定正は馬より落ちて死んだ。扇谷軍主を失い大敗して河越城に退く、長氏も伊豆に引揚る。

小田原城乗取る。明応四年 (一四九五) 長氏は、狩と称して小田原に軍を進め、小田原城より大森藤頼を夜襲を懸けて追出し、城を乗取る。是に依り相模一國を手中に収め、名を早雲と改める。

◎新方庄 八条兵衛に侵略される。

文亀四年 (一五〇四) 下河辺新方領、駿西郡八条の八条兵衛の勢に襲なれる。領主新方頼希小林の地にて対し防戦するも、深追の為流矢に当り討死。為に新方の地、八条の領する処となり、別府三郎向畑城を守る。(大

◎史書の記述には之の合戦の記載は無いが、著聞書中の合戦の死者を葬つた墳丘が、記述通りの場所に八ツ塚と称して残つていたので、之の合戦を認めても良いのではないか。

◎隣町の吉川町に関するものに次の

◎文亀四年（一五〇四）吉河大弐、下内川（吉川町）の正覚寺を起立。

◎文亀四年（一五〇四）道中位、吉河大弐 本土寺過去帳

◎文亀四年 左京阿日慶逆修、民部阿日新逆修、吉河大弐 本土寺過去帳

◎文亀四年 道教位、吉河大弐 本土寺過去帳

◎永正六年（一五〇九）川藤（吉川町）正清寺堂宇を再建、下総国夷宿城主梁田胤正が、この地の領主になつた時、荒廢していたものを再興す。（正清寺釣鐘に銘記）

永正元年（一五〇四）二月三十日改元。九月両上杉は依然として死闘を繰返していたが、中でも立川原の合戦は、

山上上杉顕定を討たんの扇谷朝良は、北条早雲・今川氏親の援を得て、両軍死力を盡して戦つたが互角に終る。

同十二月山内顕定は越後守護職上杉房能の助けを得て、再度戦い之に討勝つ。扇谷は河越城に引籠る。是に依り扇谷は敗色濃くなる「越後守護上杉房能は顕定の弟、家老長尾為景（謙信の父後に主房能を殺害）も參陣す」。

両上杉の和議成立 永正二年（一五〇五）三月両上杉は、十七年間の死闘の末扇谷家の敗色に依り、和議が成立した。北条早雲の新勢力の関東経略の前には、時即に遅く余りに傷つき過ぎた。

永正四年（一五〇七）一方古河公方家でも父子の反目から合戦が起り政子は子高基に追われて、小山頼長を頼るが

後久喜甘誓宗院に引隠させられ、

永正五年（一五〇八）越後守護職上杉房能は、家老長尾為景に殺され、

永正六年（一五〇九）越後守護代長尾為景を討たん為、上杉顕定父子は弔合戦とて、越後に出撃す。

永正七年（一五一〇）七月顕定は為景と長森にて戦い、敗死す、子憲房は上州平井へ逃げ帰る。為景は之を追つて関東に出陣、為景は、扇谷に身を寄せていた長尾景春入道伊玄に呼び掛けた、伊玄時至れりと沼田に布陣する。

永正九年（一五一一）七月上杉の臣上田蔵人政盛、早雲に通じ神奈川権現山城に反旗を翻して籠城する。

同 八月早雲は、三浦義同の城相州岡崎を攻め落す。義同逃れて住吉城に拠る。早雲之を攻めて落す。三浦義同入道道寸は息荒次郎義意の守る新井城に逃れる。

永正十年（一五一三）上杉朝興江戸を弐して、玉繩城を抜かんと激しく攻めるも、打敗かされて江戸へ退く。

同 九月三浦義同救援の爲、江戸太田資康早雲と戦い、衣笠城にて討死す。

永正十三年（一五一六）七月三年に互る籠城の未遂に、再三の江戸よりの支援も成らず、早雲の攻撃の前に屈し、城を開いて打て出て、三浦義同入道道寸・荒次郎義意父子は討死落城して、三浦氏亡ぶ。

北条早雲の関東経略は、永正九年三浦討伐に始まる。三年の歳月を要したが、扇谷も再参支援したが遂に落城したこれにより、神奈川県境の多摩川迄、早雲の手に入った。先に、小田原城を乗取り相模に侵出、三浦を新井に籠めて、玉繩に城を築き、三浦が亡ぶに及び、多摩川に小机城を取立て、江戸河越と武蔵への侵略の足懸りを作つた。

◎この期間の越谷に關係する資料は、

◎永正六年（一五〇九）に記された「東路の都登」に、小岩善養寺の附近に、会田彈正忠定祐なる人物の住いで連歌の会を催したと有る。後日、永禄二年編の小田原所領役帳に、小岩・奥戸・飯塚に所領を持つ会田中務丞の祖先？ 越谷会田家系圖中に北条氏に属して軍功有りと記す会田家の祖先か？

◎永正十二年（一五一五）五月一日、源彈正鳩谷にて討死、（千葉勢？）本土寺過去帳

◎永正十四年（一五一七）四月二十八日、高木治部小輔、番匠免にて討死す。（三郷市千葉勢）本土寺過去帳

永正十六年（一五一七）北条早雲没す。享年八十二歳、氏嚮の時代となる。

◎新方城奪還、永正十七年（一五二〇）十年十六年前騎西庄八条兵衛に押領された新方の地を奪回すべく、新方の地下人、渋江の援を得て押寄せ、向畑城に逆襲し、城將別府三郎を討取り、永年の宿念を清らして向畑城を回復する。

永正十八年（一五二一）正年六日、八条兵衛、兵を催し再び新方の地を掠め取らんとす。本陣を別府に陣し、軍配を定め千間堀に対して布陣する時、新方勢別府の本陣に舟にて夜襲を懸け、激戦の末八条勢を打負かして追散らす。

◎この時の会戦塚か、三田方・飯崎境に八ツ塚として云承有り。古志賀谷会敷三号、屋陰の八ツ塚の項参照

永正十八年一月十六日大永と改元。

北条氏經の武蔵侵攻

北条氏の本據的武蔵侵攻は、大永四年依り始まる。永正九年、三浦氏を攻め、同十三年三浦氏を新井城に亡ぼし、小机城を築いて、武蔵侵攻の準備整つた。大永二年、公方高基に語り、息晴氏に氏綱の娘を嫁がせる。

江戸城落る。毛呂太郎に殺害を懇らせて、大永四年、江戸城内の太田資高氏綱に通じたので、氏綱直ちに江戸城を攻める。資高の内應により上杉朝義は、河越城に逃れ、江戸城は氏綱の城となる。

岩槻城落る。大永五年、岩槻城内渋江三郎氏綱に通ず、氏綱直ちに之を攻めて、落す。城主資頼石戸城に逃る。続いて豊浦城・葛西城も攻取り、氏綱の城となる。

岩槻城、享徳二年、資高小沢原に出兵の留守中、太田資頼は岩槻城を奪還し、渋江三郎を討取る。三年後資頼は資高の弟資時に（正史には資頼の子）家督を譲り、加倉の滙雲寺に隠居する。

河越城落ちる。天文六年、扇谷朝興卒し、息朝定十三歳、遺言により氏綱討伐軍起す。朝定大敗して河越城も保ちがたく、逃れて松山城に退き、氏綱の追撃に逢い上州平井城に落る。河越・松山城氏綱の城となる。

国府台の合戦、天文七年二月、葛西城を攻め落し、同十月、生実御所小弓公方義明・里見義暉の掎す国府台城を攻撃、義明兄弟を討取り城落る。義明は、古河公方に代り関東公方となる野望を持ち、里見を督して武蔵侵攻を企てたが、消え去つた。

北条氏康の武蔵征討

河越大夜戦、天文十四年九月、上杉憲政は、駿河の今川義元の援を得、古河公方晴氏にも出馬を要請し、十万余の軍にて河越城を攻囲する。城將福島繁成、三千八百の城兵良く死守する。氏綱、玉繩城より救援の爲出馬し、和平の交渉するも成功せず、天文十五年四月二十日、上杉陣營に對し夜襲を懸ける。上杉軍一万三千騎討取られて敗北す。扇谷朝定・難波田氏等家臣多数敗死した。是に依り、扇谷家は断絶し、家臣大石・藤田氏等扇谷の有力武士が氏康に従つた。

太田資正、天文十五年八月、松山城奪回す。同十月、岩槻城主資時（河越夜戦には動かず、北条方か）急死に

武田信玄、天文二十二年、中信濃へ侵攻し、東筑摩郡会田郷の虚空蔵山城を落す。
越ヶ谷会田家は、信州会田依り武州越ヶ谷に来ると有り、この時の戦で武田信玄に会田郷を追われて越ヶ谷に逃れて来たものと思はれる。

三國同盟成る。

氏康は、天文二十三年、駿河今川を攻める。この時駿河の今川・甲斐の武田・相模の北条氏康は、三國同盟を約す。对上杉謙信の為の戦略か。

古河公方晴氏捕れて隠居

氏康天文二十三年、古河公方晴氏討伐を企て、田宮城・浅間台城・天神島砦等押寄せ落し、十月四日、古河城に入り、晴氏と子藤氏捕われ相州榛野に押籠め、隠居させ、義氏相続する。晴氏父子は十二月関宿城に帰る。

◎晴氏の室は、氏康の妹でその子が義氏である。天文十五年河越夜戦の時晴氏は再参の催促にも応ぜず、上杉方の攻囲軍に加わつた事が因で、不仲であつた。関宿町宗英寺(禪宗)に晴氏の五輪砦がある。左側に風化して微かに足利晴氏朝臣と読めるのが物哀しい。藤氏は千葉氏のもとに身を寄せる。

◎足利義氏は、弘治四年改元して永禄元年三月、小田原に参上、鶴岡八幡宮に詣でる。一色伊予守直勝供奉人、梶厚源太政景(十五歳)義氏の太刀役を勤める。

資正変心の風聞、弘治二年六月、景虎平井城に入る時、資正小田原に通ずの風聞有り、景虎は資正の子氏資を人質に取る、資正疑いを晴らす。

氏康、弘治三年五月、岸槻城を攻める。資正防戦、景虎上州に出馬の報に、氏康は囲を解いて上州に向う。

◎資正、小田原と天文十七年に和議しているが、この和議の破棄か。

◎氏康、永禄三年十月、岩槻城主資正に対し、長文を発し、変節を叱責して、氏康に味方する様乞う。

③弘治二年、資正小田原に通ずる風聞は真実であつたか？、又弘治三年、氏康の岩槻城攻めの後、再び氏康の威圧に心動すか？、永禄元年資正の子政景が義氏の太刀役を勤め、永禄二年北条氏方の他國衆として所領役帳に載り。永禄三年、又々謙信の誘に資正上杉方となつた事の、氏康の叱問状が証処である。戦国武将の生残る為の苦惱が良く浮影された所である。又小田原北条の戦略の巧みさが感じられ、閉關、戦略と陽動作戦、謀略と内通による侵略、遠大なる計画にもとずく戦術が良く現れている。

◎永禄元年三月、足利義氏、小田原へ参上の時、資正の息（十五歳）が義氏の太刀役を勤めている。永禄二年小田原所領役帳に、他國衆として、岩槻城主資正と載る。

謙信、管領職就任の準備

謙信、永禄二年五月、上洛の為の通路の領主と和して、莫大なる献上の金銀銅他を持つて上洛、將軍義輝依り管領職を受領、輝の字を賜う。

謙信、管領就任式を兼倉で挙行する為の準備として、十月、上野平井に進出、前橋の厩藩城を奪い、関東進出の準備をする。岩槻太田三楽齋資正、是に呼応して勢力挽回に努め、寿能城を築き、松山城を奪回する。忍の成田氏始め、北武蔵の地侍達は相次いで謙信に従う。

管領就任式兼倉鶴岡八幡宮に於て挙行す。

永禄四年三月、輝虎上・下野、武蔵の兵を従えて、大挙して小田原に向い進撃し、途中北条方の城を落す。北条勢は退いて、時久戦を計る。輝虎大した抵抗も無く小田原城下迄押寄せ。輝虎小田原を封じて置いて、兼倉鶴岡八幡宮に於て、関東管領職の就任式を関東諸将の前にて無事挙行した。名を上杉謙信と改める。この時成田氏と争う。謙信は式終了すると早々に上州に引揚げ、越後に帰る。

川中島の合戦、永禄四年九月、第四回目の合戦始まる。武田方三千五百騎、上杉方五千騎の戦死者を出したと云はれる大激戦であつた。

依り、資正家督を相続、城主となる。系図上では、資頼の子資時弟資正となつてゐるが、実は資時は、江戸太田資高の弟ではあるまいか。

北条氏康、同、十月下旬、資時の死を聞いた氏康は直ちに出兵す。岩槻城に押寄せ、松山城を攻める。上田広政の内応により、松山城落ち、再び氏康の持城となる。

◎太田資時は北城方である。天文二年岩槻城主太田資頼は、「子資時に家督を譲り」とあるが、新編武蔵風土記稿には、「資時は岩槻城を与奪」とあり、上杉方の資頼が北条方の資時に岩槻城を譲ると云う事が少々不思議な話である。氏康が死を聞いて岩槻城に出兵したのは、城主となつた資正が上杉方の将である故であり、城が激方の城となつた事を意味するからである。

◎資時とは真実の資頼の子であつたのだろうか、疑問が湧いて来る。資時は、江戸太田資高の弟の中に、資時・資貞の二人の弟がいる、先に岩槻城北条の持となつた時、資高が城代として度々岩槻より出兵している、(岩槻寺談) その出陣の留守に資頼が城を奪還した。そして三年にして資時に城を譲つてゐる。実子資正が幼少の為に北条の圧力に屈して、一族で北条方の資時に譲つたものと思える。そして又々資正長じて岩槻城を与奪したか、「資時急死の為岩槻城を継ぐ」とある個所に疑問が生じて来る。

氏康、天文十六年十二月、再び岩槻城を襲う。翌十七年正月、氏康と資正は和議する。この時資正の長子氏資と氏康の娘と婚約成る。資正後日、岩槻城追放となる遠因となる。

この時期の越谷市内の板碑

明応三年(一四九四)
明応四年(一四九五)
明応六年(一四九七)

大沢四丁目地藏堂
見田方関根享氏
大松長野本家主勢様
明応八年(一四九九)
享祿三年(一五三〇)
天文九年(一五四〇)

西方大聖寺
東方中村千枝氏墓地
大泊安園寺

太田資正の時代

河越の大夜戦（天文十五年四月）十万余の上杉方攻囲軍を向える、河越城兵參千八百と氏康手兵八千に依る、突然の上杉陣營に對する夜襲で、上杉勢大敗北を喫し壹万三千の敗死者を出したと云はれる。上杉顕定は、この戦の後再び武藏をうかがう力を失つた。

神流川の合戦、天文二十年、氏康一万余の軍勢で、上・武国境の神流川で上杉憲政と決戦する。憲政は、太田・長野・両毛の兵を以て善戦するも、切返されて敗北する。憲政は越後春日山に赴き、長尾景虎に上杉家の名跡と家督を譲与し、管領職を讓る。

上杉謙信の台頭

長尾景虎関東出馬

氏康、天文二十年八月、上州平井城を攻め落し、憲政の子龍若丸捕わる。これに依り長尾景虎、関東に出馬す。景虎、関東に出馬、上州平井城を奪回す、天文二十一年関東経略始まる。

天文二十二年、古河公方晴氏を討たんとす。晴氏、古河の諸勢と千葉利胤の援助で、村岡河原にて合戦す。晴氏二千余騎討取られて敗北す。

◎越ヶ谷会田家の出自

天文二十二年三月、甲斐の武田信玄は、佐久・小県郡の兵を擁して東筑麻郡に侵攻、長野と松本との犀川流域の諸城を略取した時、佐久・小県依り峠を越えて攻められ会田郷の城落ちる。（城郭全集）越ヶ谷瓜のツルに「元來会田出羽事者、海野小太郎子孫而、信州会田自」と云われる理由の戦である。会田の城は同七月、謙信の援にて奪回を試みている。

◎謙信の関東出馬は次第に少くなる。(1)川中島の合戦での傷が多きいかり。(2)管領職の就任式の為に利用されたのか?。何れにしても、三楽斎資正は、北条氏の為に次第に圧迫される。

国府台の合戦

永祿七年(一五六二)正月資正は、里見氏と呼応して、国府台城に籠る、北条軍と戦い、初戦の勝利に気を許したる所その夜の夜襲にて大敗北す。里見は上総に退き、三楽も岩槻に逃れる。この戦で、三楽斎の手兵のほとんどを失うと云う。(俗に岩槻三千騎と云はれていた。)

氏資、氏康の娘と祝言する。

同五月北条氏康との前々からの約束により、氏康の娘をめとる。

資正城より追放さる。

三楽斎資正・源六郎政景・江戸太田康資岩槻城より追放される。氏資岩槻城主となる。三楽斎その後奪回に厲心するも、再び帰れず。天正十八年九月八日常陸の片野城で風雲の一生を終る。

◎越谷地方には、根底よりの大変化がある。

◎岩槻城付の地故に、資正方の者は所領失い、追放され、蟄居させられている。そして小田原北条方の武士達には、取上げた地から、新恩給の地として給せられている。

◎越ヶ谷会田家が、瓜のツルの中に、「元来会田出羽事者、海野小太郎子孫而、信州会田自、天正中越ヶ谷村蟄居、越ヶ谷領一円、所持致居候処、云々」とある事がそれを良く表わしている。

◎その時期は、第一次、永祿七年七月国府台合戦後、資正・政景父子は氏資の為に岩槻城より追放される。

第二次、永祿十年(一五六七)太田源五郎氏資が、上総三船城外で討死以後。

第三次、天正六年七月太田氏房栃木攻の時、初陣岩槻衆の中に初見するので、それ以後の時期。

◎北条家臣の会田・麦塚の中村・八条南馬場の浜野家等の系図によれば、これ等の事情が理解出来る。

◎本田家文書、永祿五年に「前々依約束の舍人・越谷は大郷であるので、重々走廻る事肝要」との文書有り。

岩槻城主氏資、討死

北条勢、安房里見氏を上総に攻める時、三船城外にて太田氏資家臣五十三名と共に討死、太田勢力は壊滅す。◎是に依り旧太田勢力は全滅し、家臣達の行方は如何様になつたか、明らかではないが、それらの残された家族の上に、年貢米・賦役・陣夫の賦課等々重くのしかゝつて来た事である事が、内山弥衛門名で、数々の書状を見る事が出来る。

武田信玄、関東出馬。元龜二年正月、信玄、三楽齋父子に年頭の書送り、武蔵岩槻城回復は明春になるであろうとして、参陣を乞う。

◎岩槻城回復は今春との信玄の書に、三楽齋、心動くか。

◎この時期、上杉の勢力弱まり、北条の圧迫から逃れる為に、武田信玄に心を寄せるか。

上杉謙信、元龜二年三月、謙信、三楽齋父子の変心を怒る。翌三年、謙信、佐竹・里見・三楽齋等の離反を嘆く氏繁、元龜三年、岩槻藩臣に着到状改む。

◎氏繁文書、大相模不動院に岸槻城堅固を祈願せしむ。

上杉謙信、関宿城攻始まる。

元龜三年九月、謙信、三楽齋父子に再参書を送り味方する様を乞う、謙信、三楽齋に先年の不和を謝る。是に依り

三楽齋父子は、再び謙信に与し、小田氏治の城を攻め取る。元龜四年十二月

太田父子、再び常陸乙幡に小田天庵を破り小田城攻略す。天正元年四月中旬の事。

関宿城落城

謙信、天正一年一月前橋城に着陣、関宿城中心に北条方と謙信の争奪戦始まる。四月、謙信、上武国境に布陣し十一月、謙信、北条の城関宿城落す。

長篠合戦 天正三年 織田信長・徳川家康の軍は、武田の騎馬隊を壊滅する。

上杉謙信、天正六年三月、春日山にて卒す。半戦を待たずして、御館の乱始まり上杉軍団半減となる。

織田信長、天正八年、門徒宗総本山石山本願寺落城す。織田の天下統一は一歩進む。天正十年三月、織田軍、武

田勝頼を攻める。同十一日、武田勝頼滅亡す。武田氏を亡ぼした信長は、毛利を攻めるべく京都に陣を進める時同 六月二日夜半、明智光秀の為に、本能寺に於て殺害される。天下統一の夢は、豊臣秀吉に受継がれる。

古河公方義氏没 天正十年、古河公方館にて没す。

北条氏は、天正六年、下野の皆川氏を攻め、大平山城を襲う、太田十郎氏房（十五歳）参陣、天正九年、北条氏、佐野城攻める。岩槻衆参陣。天正十三年、北条氏、下野皆川氏を攻める、藤岡に布陣す岩槻衆参陣。
◎天正六年依り度々皆川氏・佐野氏を攻め、古河城の安泰を計るか。

◎武田信玄、元龜元年、関東へ出馬の節には、謙信を見限り信玄に通じ、元龜三年、謙信、和を乞い謝罪するに及び、謙信に味方する等太田三樂齋資正父子の、岩槻城奪還への執念の様が、うかがう事が出来る。

◎北条氏はこの間、武蔵の経営に鋭意努力している。越谷地方の北条方家臣の新恩地給付は、之の期間に多く見られる。入部者は、開墾による領地拡大と生産食糧の確保に戦乱で慌廢した地方の回復に努力する時期であつたであらう。この時、岩槻城付諸將に元龜三年、着到状の改め発する。大相模不動院には岩槻城堅固の祈願状発せられ、風雲急を告げる。

◎謙信、天文二年二月、関宿城攻撃始まり、十一月関宿城落城する。天正六年三月謙信卒して越後の脅威から解放される。天正十年、武田亡ぶとすぐに織田信長も殺害されて、天下の情勢は豊臣秀吉の世となり、北条家に取つては、重大な時期に直面するのである。

◎天正十三年、氏房、太田氏資の亡れ片身と祝言を挙げ、太田氏房と改め、岩槻太田の血を継ぐ。旧岩槻の地下人達の協力結衆が必要となつた事がうかがわれる。翌天正十四年より、豊臣秀吉の小田原征伐が始まる。

◎天正十四年、岩槻城大譜請始まり、人足・資材・賦課徴税、領内の十五歳〜七十歳迄の百姓町人の名を書出し、戦鬪要員として動員の令発し、次々と戦争準備の命令が発せられて戦雲急の様が推測される。

◎天文十八年、秀吉の攻撃開始、次々と関東の諸城落城し、遂に大決戦を戦わずに小田原城落城する。

河越夜職以後の越谷市内の板碑

◎この時代の板碑が、その前の時代の板碑と大きく異なるのは、一仏から三仏にそして、線刻来迎や金彩と変化して来た板碑が、この時代を境に、十三仏板碑・二十一仏板碑へと変化して行くのである。そして越谷の場合、天正六年を最後に忽然と青石塔婆と呼ばれる板碑の姿が消えてしまうのである。

| | | | | | | | | |
|----|------|--------|-----|------|--------|-------|-----------|----------|
| 天文 | 九年 | (一五四〇) | 四月 | 十五日 | 十三仏 | 至勢供養 | 結衆 | 大泊安国寺 |
| 天文 | 二十一年 | (一五五二) | 九月 | 八日 | 図像弥陀三尊 | 庚申待供養 | 結衆 | 西方日枝神社 |
| 天文 | 二十二年 | (一五五三) | 二月 | 吉日 | 図像弥陀三尊 | 庚申待供養 | 結衆 | 東方仲立墓地 |
| 天文 | 二十三年 | (一五五四) | 十一月 | 二十三日 | 二十一仏 | 庚申待供養 | 欠 | 西方田向墓地 |
| 天文 | 二十四年 | (一五五五) | 六月 | 十二日 | 弥陀三尊 | 信譽和尚 | 欠 | 増林道路端 |
| 天文 | | (一五五) | | | 弥陀三尊 | 道賢 | 欠 | 下間久里不動堂 |
| 永祿 | 元年 | (一五五八) | 十二月 | 吉日 | 二十一仏 | 庚申待供養 | 欠 | 大房浄光寺路傍 |
| 永祿 | 七年 | (一五六四) | | | 不明 | | 欠 | 四丁野迎援院 |
| 元亀 | 三年 | (一五七二) | 二月 | 十一日 | 二十一仏 | 申待供養 | 結衆 | 西方道祖神社 |
| 天正 | 二年 | (一五七四) | 二月 | 吉日 | 釈迦三尊 | 申待供養 | 欠 | 中島道路端 |
| 天正 | 三年 | (一五七五) | 八月 | 吉日 | 二十一仏 | 申待供養 | 欠 | 増林薬師堂 |
| 天正 | 三年 | () | 十月 | 吉日 | 二十一仏 | 申待供養 | 結衆 | 東小林浜野博一氏 |
| 天正 | 三年 | () | 十二月 | 吉日 | 二十一仏 | 申待供養 | 結衆 | 千疋東養寺 |
| 天正 | 六年 | (一五七八) | 二月 | | 二十一仏 | 申待供養 | 欠 | 増林上組墓地 |
| 天正 | 六年 | (一五七八) | 二月 | | 十三仏 | 申待供養 | 欠 | 東小林浜野博一氏 |
| 天正 | □年 | (一五) | 二月 | 十七日 | 弥陀三尊 | 妙弥禅尼 | 光明真言野島浄山寺 | |

北越谷の歴史を語る。と題して稿を起したが、北越谷(大房)のみでは歴史的年代が繋がらないので、広い範囲わたり関連の有るものを、求めて説明したので、煩雑となり返つて理解し悪くなつてしまつた事を、御了承願ひ度い。結果的には、越谷の歴史となつてしまつた事を、御許し願ひ度い。

古代に付いては、国史大系から引用したので、戦後の日本史の記載と異質のものとの感を持つ向も有る事であるが、始めに述べた様に、戦後の混乱の中から出発した歴史は、多少修正される時期でも有り、又そう有るべきでもあるので、敢てその資料を使つて、北越谷の地は古くから開けていたと云う事を説明した。年代的に云うと、戦後日本史では考えられぬ年代の話であり、沢山の御批判が有る事と思う。

古代から中世にかけての、越谷地方の資料は無いと云う方が正しい位、歴史上では越谷と云う地名は出て来ない、資料の無いものは、歴史ではないと云う立場から見れば、越谷市には鎌倉時代以前の歴史は無い事になる。越谷市史を見ても、その点で大変苦労して居る様が見える、越谷市の歴史を説明しているはずが、実は埼玉県史であつたりしている。下河辺庄や新方庄に付いては、特に大川戸御厨等は研究不足の為、良く解らない尽記してしまひました。南北朝期も疑問が次々と湧いて来るが、今更究明する時間が無いので、そのまま記してしまひました。

戦国時代(1)これ又勉強不足と云えば、体裁が良いが実は能力不足の為に解ら無い所の箇所ばかりで有る。出来るだけ資料を並べて、読者に解読して戴き度く、不必要なもの迄載せてしまひ、必濃過ぎてしまつた。古志賀谷氏の事に関しては研究が進まない尽く記してしまつた。

戦国時代(2)(3)は、敵味方がはつきりせず、城も争奪が繰返され、内応が有る度に人物が敵味方入れ変り、強い勢力が台頭すれば、その勢力下に伏し、他の新興征覇者が出れば是に属す為、読者が混乱してしまつて程、入り乱れている時代であるので、出来るだけ筋道が解る様に為、削除出来ずに多く書き過ぎた。

情報は多い程、適確に判断が出来ると云うが、その整理が出来ない程多過ぎると、返つて混乱してしまつて、今回は、年代順に余り多く、正しくとの作意の為に情報過多となり、下痢気味となる事を反省している。

おはりにのぞみ、北越谷公民館の企画に、乗せて戴きました事を感謝致します。

昭和五十七年八月一日

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

主催
題
講師
とき
ところ

北越谷公民館
北越谷の歴史

山崎善司

昭和五十七年七月二十五日
越谷市北越谷四一八

TEL. 7615758